

# 曲川遺跡Ⅱ

—京奈和自動車道「大和区間」建設に伴う発掘調査報告書—

2024年3月

奈良県橿原市

## 序

ここに曲川遺跡の発掘調査報告書を『橿原市埋蔵文化財調査報告 第20冊 曲川遺跡Ⅱ』として刊行します。本書は、奈良県橿原市雲梯町に所在する曲川遺跡において橿原市教育委員会が平成13年度に実施した発掘調査の成果をまとめたものです。

橿原市西部では、京奈和自動車道の建設に伴う発掘調査により、縄文時代から中世にかけて、相次いで新たな遺跡が発見されています。本書で報告を行う曲川遺跡は、遺跡内で本格的な調査が行われる前より弥生時代後期から古墳時代初頭の土器が出土することが知られていました。1970年代以降、京奈和自動車道建設を含む開発工事による発掘調査が急増し、その結果、新堂遺跡を含めた周辺一帯に中世の集落が広く展開することが明らかとなりました。

本書で報告を行う橿教委2001-8次調査では、掘立柱建物、屋敷墓、井戸など平安時代後期を中心とする屋敷地の遺構が確認され、当該時期の屋敷の構成を知ることができました。曲川遺跡周辺に展開する中世の集落・屋敷の中でも比較的古い時代のものであり、曲川遺跡における中世のはじまりを考える上で重要な成果です。また、古墳時代中期の溝もあり、曲川遺跡の移り変わりを追うことができる発掘調査となりました。

本書が、多くの方々に活用され、当遺跡の重要性を周知する機縁となれば幸いです。

最後になりましたが、現地の発掘調査及び本書の刊行にあたってご協力いただいた関係諸氏ならびに諸機関に厚く御礼申し上げます。

令和6年3月20日

橿原市長 亀田 忠彦

## 例 言

- 1 本書は、奈良県橿原市雲梯町に所在する曲川遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本書で報告を行う発掘調査は、京奈和自動車道（大和区間）建設に伴って実施している。国土交通省 近畿地方整備局 奈良国道事務所の委託を受け、奈良県教育委員会・奈良県文化財保存課の指導のもと、奈良県橿原市教育委員会・橿原市が発掘調査及び整理・報告作業を担当している。
- 3 発掘調査及び整理・報告作業にかかる費用については、国土交通省 近畿地方整備局 奈良国道事務所が負担している。
- 4 現地調査期間は平成 13（2001）年 10 月 22 日～平成 14（2002）年 3 月 29 日である。
- 5 遺物整理・報告書作成期間は令和 3（2021）年度～令和 5（2023）年度である。なお、橿原市では令和 3 年度まで埋蔵文化財行政を教育委員会文化財課が担当していたが、令和 4 年度からは同担当部署が市長部局へ移管となり魅力創造部文化財保存活用課が担当している。
- 6 現地調査時の体制は、橿原市教育委員会 教育総務部長 守道文康、文化財課長 佐藤幸一、課長補佐 波部吉伸、係長 齋藤明彦、主任 竹田正則、嘱託 濱岡大輔である。現地作業は竹田・濱岡が担当した。

また、遺物整理時の体制は、令和 3 年度が文化財課長 竹田正則、課長補佐 露口真広・松井一晃、統括調整員 平岩欣太・横関明世、主査 石坂泰士・杉山真由美、技師 上井佐妃、令和 4・5 年度が文化財保存活用課長 露口真広、課長補佐 松井一晃・平岩欣太、係長 石坂泰士、主査 杉山真由美、技師 上井佐妃である。整理作業は上井が主に担当した。
- 7 発掘調査及び整理作業を実施するにあたって、地元各位をはじめ、国土交通省 近畿地方整備局 奈良国道事務所、独立行政法人奈良文化財研究所、奈良県、奈良県立橿原考古学研究所より多大な御協力を得た。また、発掘調査及び遺物整理にあたっては、石野博信氏、今尾文昭氏、佐々木好直氏、塚本敏夫氏、寺沢薫氏、松田真一氏、宮原晋一氏、本村充保氏に御指導、御助言を賜わった。記して感謝申し上げたい。
- 8 出土遺物をはじめ調査記録は、橿原市で保存している。
- 9 本書所収の写真のうち、現場調査写真は調査担当者が、航空写真は株式会社アイシーが撮影を行った。遺物写真は株式会社地域文化財研究所が撮影を行った。
- 10 本書の編集は、上井が担当した。執筆は、第 IV 章第 2 節を濱岡大輔（特定非営利活動法人 広島文化財センター）、その他を上井が担当した。
- 11 橿原市教育委員会では、調査年度を西暦で表し、その年度内に行われた発掘調査名称を「年度一調査次数」の形で示している。本書で報告を行う調査に対しては、橿教委 2001 - 8 次調査という番号を付与している。調査記録や出土遺物には、この番号を記して整理・保管している。調査時には、調査地の小字名「馬場」から採って、「曲川遺跡 馬場地区」の名称も用いているが、混乱を防ぐため、本報告書ではこの呼称を使用しない。
- 12 本書で扱う土器の編年・年代観については以下の文献を参照した。

尾上実・森島康雄・近江俊秀 1995「瓦器」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社

奈良市教育委員会 2014『南都出土中近世土器資料集—奈良町高天町遺跡（HJ 第 559 次調査）出土資料—』

小森俊寛 2005『京（みやこ）から出土する土器の編年の研究』京都編集工房

宮崎亮一・山本信夫 2000『大宰府条坊跡XV』太宰府市の文化財 第 49 集 太宰府市教育委員会  
寺澤薫 1986「畿内古式土師器の編年の二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所

大和弥生文化の会 2003『奈良県の弥生土器集成』

## 凡 例

- 1 本書で示す方位は座標北を使用した。座標値は世界測地系（平面直角座標第Ⅵ系）に基づく。
- 2 写真図版に掲載している遺物の縮尺率は任意である。
- 3 遺構・遺物の図面縮尺は各図に示している。
- 4 遺構断面図の標高値はメートル表記である。小数点以下の記述がない場合、小数点以下の値は 0 である。標高値は東京湾平均海面（T.P.）からの値である。
- 5 遺物実測図の番号は本書全体の通し番号で示している。図版の遺物番号もこれと一致している。
- 6 土器の実測図については、時期を問わず須恵器・陶磁器は断面を黒塗りで、その他の土器は断面を白抜きでそれぞれ表現している。
- 7 掲載している土器の拓本図は、特に注釈の無い限りは外面の拓本である。

# 目 次

序	i
例言	ii
凡例	iii
目次	iv
挿図・表目次	v
第1章 調査の経過	
第1節 調査に係る経緯	1
第2節 発掘作業の経過	2
第2章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	7
第3章 調査の成果	
第1節 調査の方法	11
第2節 基本層序	12
第3節 遺構	15
第4節 遺物	41
第4章 総括	
第1節 調査成果のまとめ	61
第2節 曲川遺跡（榎教委2001-8次）の木棺墓について	65
報告書抄録	70
図版	

## 挿 図 目 次

図 1	調査地位置図	6
図 2	調査地周辺遺跡地図 (S = 1/12,500。遺跡範囲は 2023 年度当初の内容)	8
図 3	調査地周辺の地形と曲川遺跡の発掘調査地点 (S = 1/3,000)	9
図 4	調査区北壁土層断面図 (S = 1/40)	13
図 5	調査区西壁土層断面図 (S = 1/40)	14
図 6	上層遺構配置図 (S = 1/500)	16
図 7	上層遺構配置図 (耕作溝を除く) (S = 1/500)	17
図 8	ST01 遺物出土状況・断面図 (S = 1/20)	18
図 9	SB02・03 平面・断面図 (S = 1/80)	19
図 10	SB04 平面・断面図 (S = 1/80)	20
図 11	SB05 平面・断面図 (S = 1/50)	21
図 12	SB06・07 平面・断面図 (S = 1/80)	22
図 13	SB08 平面・断面図 (S = 1/80)	23
図 14	SB09 平面・断面図 (S = 1/80)	24
図 15	SB10 平面・断面図 (S = 1/80)	25
図 16	SB11 平面・断面図 (S = 1/50)	26
図 17	SB12 平面・断面図 (S = 1/80)	26
図 18	SD14・15 断面図 (S = 1/40)	27
図 19	SE16 平面・断面図 (S = 1/40)	27
図 20	SE17 平面・断面図 (S = 1/40)	27
図 21	SX18 平面図 (S = 1/40)・遺物出土状況図 (S = 1/20)	28
図 22	SX18 遺物出土状況図 (S = 1/20)	29
図 23	SK19 平面・断面図 (S = 1/40)	29
図 24	SK20・21 平面・断面図 (S = 1/40)	29
図 25	SX25 平面・断面図 (S = 1/40)	30
図 26	SX22 平面・断面図 (S = 1/40)	30
図 27	SX23 平面・断面図 (S = 1/40)	31
図 28	SX24 平面・断面図 (S = 1/40)	32
図 29	旧河道 断面図 (S = 1/40)	33
図 30	坪界溝 断面図 (S = 1/40)	34
図 31	下層遺構配置図 (S = 1/500)	35
図 32	SD27 断面図 (S = 1/40)	35
図 33	SD28 断面図 (S = 1/40)	36
図 34	SD29 断面図 (S = 1/40)	36
図 35	SD30・SK31 南東壁土層断面図 (S = 1/50)、 SD27・SD30・SK31 断面図 (S = 1/40)	37
図 36	SK31 遺物出土状況図 (S = 1/20)	38
図 37	調査区中央畦 断面図 (S = 1/50)	39
図 38	SK32 平面・断面図 (S = 1/40)	40
図 39	耕作溝出土遺物① (S = 1/4)	42
図 40	耕作溝出土遺物② (S = 1/4)	43
図 41	耕作溝出土遺物③ (S = 1/4・1/2)	44
図 42	耕作溝出土遺物④ (S = 1/4・1/2)	45
図 43	ST01・SB09・SB11・SD14・SE17 出土遺物 (S = 1/4・1/2)	46

図 44	SX18 出土遺物① (S = 1/4) . . . . .	47
図 45	SX18 出土遺物② (S = 1/4・1/2) . . . . .	48
図 46	SK21・SX22・23・24 出土遺物 (S = 1/4・1/2) . . . . .	49
図 47	SX25・旧河道・坪界溝出土遺物 (S = 1/4) . . . . .	50
図 48	ビット出土遺物 (S = 1/4・1/2) . . . . .	51
図 49	SD27 出土遺物 (S = 1/4・1/2) . . . . .	52
図 50	SD28・29 出土遺物 (S = 1/4) . . . . .	53
図 51	SD30・SD30 落ち込み出土遺物 (S = 1/4) . . . . .	54
図 52	SK31 出土遺物 (S = 1/4・1/2) . . . . .	55
図 53	SK32・SX33 出土遺物 (S = 1/4) . . . . .	56
図 54	包含層・重機掘削時等出土遺物① (S = 1/4・1/2) . . . . .	57
図 55	包含層・重機掘削時等出土遺物② (S = 1/2) . . . . .	58
図 56	曲川遺跡 7・14・20 次調査遺構変遷図 (平安時代中期～平安時代後期) (S = 1/1,000) . . . . .	63
図 57	曲川遺跡 7・14・20 次調査遺構変遷図 (平安時代後期) (S = 1/1,000) . . . . .	64
図 58	棧のある木棺墓 (S = 1/40) . . . . .	69

## 表 目 次

表 1	遺構名対応表① . . . . .	11
表 2	遺構名対応表② . . . . .	12
表 3	木棺墓計測表 . . . . .	69

# 第 I 章 調査の経過

## 第 1 節 調査に係る経緯

京奈和自動車道は、京都・奈良・和歌山を結ぶ自動車専用道で、国土交通省により各地で建設が進められている。奈良盆地内の京奈和自動車道は、令和 4（2022）年度末時点で、「大和区間」のうち郡山下ツ道ジャンクションから橿原北インターチェンジまで開通・供用している。新堂ランプより南にあたる「御所区間」では残されていた御所南インターチェンジから五条北インターチェンジまでの区間が平成 29（2017）年 8 月に供用され、橿原高田インターチェンジ以南の区域が全線開通となった。このうち、橿原市域では、市内西部の東坊城町から飯高町にかけてを縦断している。

橿原市域における京奈和自動車道建設に伴う発掘調査は、国道 24 号線より南において昭和 63（1988）年より断続的に実施されてきた。橿原市教育委員会では奈良県教育委員会の依頼を受け、橿原バイパスと国道 24 号線の接続部から南の御所インターチェンジまでの距離約 5 km の区間を対象に、平成 13（2001）年度から平成 22（2010）年度にわたり発掘調査を実施した。同区間は大和高田バイパスと交差する橿原高田インターチェンジを境として、北が「大和区間」、南が「御所区間」となる。発掘調査を実施する区域の分担については、国土交通省、奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所、大和高田市教育委員会、御所市教育委員会及び橿原市教育委員会の協議の元で決定された。

当市域内における京奈和自動車道の建設予定地では、これまで本格的な調査が行われておらず、遺跡の詳細が不明、あるいは埋蔵文化財の包蔵地外とされてきた地域が大半であった。しかし、昭和 63（1988）年から開始された京奈和自動車道建設を契機とする一連の発掘調査によって、遺跡の範囲・内容が変更される、あるいは新たな遺跡の存在が認識されるような発見が相次いだ。

曲川遺跡ではこれまでに奈良県立橿原考古学研究所、財団法人元興寺文化財研究所、橿原市教育委員会によって 22 回の調査が行われており、本調査は 14 回にあたる<sup>1)</sup>。北側隣接地において実施された 7・11 回調査では、縄文時代晩期～江戸時代までの遺構が確認されており、その南隣にあたる本報告の調査地点においても同様の時期の遺構の検出が想定された。

### 【註】

- 1) 調査回数については、下記を参照した。第 IV 章の文末に【曲川遺跡発掘調査文献一覧】を記載している。船業紀子・佐藤重型・坪井清足・辻本裕也・藤井章徳 2006『曲川遺跡発掘調査報告書（2004 年度調査）』財団法人元興寺文化財研究所  
北山峰生・松井一兎 2005『曲川遺跡』（奈良県立橿原考古学研究所調査報告集第 90 冊）奈良県立橿原考古学研究所  
村田裕介・藤井章徳・佐藤重型 2009『曲川遺跡発掘調査概要報告書（2007 年度調査）』財団法人元興寺文化財研究所



## 第2節 発掘作業の経過

本発掘調査は、平成13(2001)年10月22日から平成14(2002)年3月29日までの期間実施した。実働日数は101日を数える。その間、作業員は延べ2058.5人を要した。調査の日々の記録は、以下の調査日誌抄録に掲げた。なお、遺構名は調査時のものである(本報告書で用いる遺構名との対照は第三章第1節の表1・2を参照)。

### 調査日誌抄録

平成13(2001)年

10月22日(月)

重機2台搬入、安全柵設置、器材搬入、調査区北東部より重機掘削開始。地表下0.5mで素掘溝検出。

10月23日(火)

調査区北東部から南部にかけて重機掘削、素掘溝検出。壁切り、排水溝掘削。瓦器(埴・皿)、土師器等が出土。

10月24日(水)

調査区南部を重機掘削、素掘溝検出。壁切り、排水溝掘削。旧河道南上面から瓦器片が多く出土。下層には弥生時代中期後半の遺跡が存在する可能性が高い。

10月25日(木)

調査区中央部南側を重機掘削、素掘溝検出。壁切り、排水溝掘削。素掘溝5時期以上存在する。

10月26日(金)

調査区中央部を重機掘削、調査区北東部遺構精査、素掘溝掘削開始。調査区約2分の1掘削終了。

10月29日(月)

調査区中央部北側を重機掘削、調査区東部遺構精査、素掘溝掘削。素掘溝の最も新しいものは東西の淡黄白色の粘質土。その次のものが南北・東西方向の灰白色の粘土。

10月30日(火)

調査区中央西側を重機掘削、調査区東部遺構精査、素掘溝掘削。調査区東側の南北方向の素掘溝の下より、桃の種、サヌカイト片の入ったビットを確認。下層の時期は不明。今日まで、前日までに精査済の素掘溝の約半分掘削終了。

10月31日(水)

調査区西側重機掘削、調査区東部遺構精査、素掘溝掘削。調査区東側の素掘溝に切られた炭が混入した遺構を検出。調査区の東側は、南側に向かって検出面(赤褐色粘質土)に砂が混じるようになっていく。調査区西側の北隅にも砂層及び微砂層が断面で確認でき、南側で確認できている旧河道に続くものと判断できる。

11月1日(木)

重機掘削終了、重機搬出。排水溝掘削。遺構精査、素掘溝掘削。調査区西側の北・南部で河道の東側を確認。西側中央よりやや南で素掘溝検出面の1層下で炭混じりの層が幅4mほどあり、瓦器埴・土師器皿(11世紀後半)が出土。素掘溝の下から、

ビット、方形土坑を検出。南側の東西方向の落ちから出土している高坏は、弥生時代終末期～古墳時代前期(庄内期か)のものと考えられる。

11月2日(金)

ベルトコンベア搬入、設置。排水溝掘削、素掘溝掘削。調査区東側の中ほどよりも素掘溝の下よりビットが複数検出されている。調査区北壁中央と東隅で矢板をうち、シートをかけて壁面を保護。

11月5日(月)

調査区西側中央付近まで遺構精査、素掘溝掘削。ベースとなる層が調査区中央より粘質土(赤褐色)から砂混じりの層に変わる。

11月6日(火)

調査区東部遺構精査、素掘溝掘削。

11月7日(水)

プレハブ、トイレ設置。遺構精査、素掘溝掘削。調査区南側やや東よりから、素掘溝の下より直径3mほどの階円形の土坑検出。また、この土坑の北側には「L」字形の溝があり、南側は途中で途切れ、南側の東西には延びない。

11月8日(木)

調査区南部遺構精査、素掘溝掘削。調査区南側に検出した旧河道の埋土10～20cm下に素掘溝(東西方向)が入っていく可能性がある。炭の入った土坑・溝等を検出。また、東西方向の素掘溝で馬歯等出土。

11月9日(金)

遺構精査、遺構(素掘溝含む)掘削、「L」字形の区画溝検出。屋敷の区画溝と考えられる。溝の内側にあたる位置から柱穴及び炭混じりの遺構が検出されている。柱穴の位置関係により建物が少なくとも1棟はあったと考えられる。

11月12日(月)

遺構精査、遺構(素掘溝含む)掘削、区画溝周辺の建物検出。

11月13日(火)

遺構精査、遺構(素掘溝含む)掘削、「コ」の字状溝検出。南北方向の素掘溝(古)の上面から、緑釉陶器の碗が出土。また、調査区西側の南北方向の素掘溝の下層より、「て」字状口縁の土師器皿及び瓦器などを多く含む土坑もしくは溝を検出。

11月14日(水)

遺構精査、遺構(素掘溝含む)掘削。

11月15日(木)

遺構精査及び掘削(素掘溝多数)。調査区の北部東側で東西方向に並ぶと考えられる柱穴(3×1間)

を確認。また、この周辺にはいくつかの柱穴、ピットがある。

11月16日(金)

遺構精査、遺構掘削(素掘溝多数)。調査区西側の素掘溝の掘り残しを検出及び掘削。シート養生。

11月19日(月)

遺構精査、遺構掘削(素掘溝多数)。基準点の確認。調査区東側(北部)に円形の遺構があり、それにとりつく形で東西方向の溝がつき、その西側に方形の遺構が検出された。遺構の性格は不明であるが、方形の遺構の埋土中には瓦器等が含まれる。

11月20日(火)

遺構精査、遺構掘削(素掘溝多数)。前日までに確認していた柱穴(建物)に重複及び連なる状態で径の小さな柱穴を確認。

11月21日(水)

遺構精査、遺構掘削(素掘溝多数)。前日までに確認している柱穴及びピットの西側でも複数のピットや柱穴を検出。調査区内の地区杭打ち開始。

11月22日(木)

遺構精査、遺構掘削(素掘溝多数)。調査区北西部には、これまで検出してきた素掘溝より古い素掘溝を検出。同じく北西部の素掘溝下より、方形土坑と考えられる遺構を確認。検出した長さは、60~80cmほど。地区杭打ち終了。

11月26日(月)

遺構掘削(素掘溝多数)、遺構配置図作成開始。シート養生。

11月27日(火)

遺構掘削(素掘溝多数)。遺構配置図作成。

11月28日(水)

遺構掘削(素掘溝多数)。東西方向の素掘溝は新旧2期あり。遺構配置図作成。

11月29日(木)

遺構精査、掘削。遺構配置図作成。調査区北西部を精査した結果、北側の調査区中央から西にかけて坪界溝らしき幅広の溝(片側のみ)を確認。しかし、東西方向の素掘溝が重複している可能性も考えられる。

11月30日(金)

遺構精査、掘削(素掘溝多数)。遺構配置図作成。

12月3日(月)

遺構掘削(素掘溝多数)。遺構配置図作成。

12月4日(火)

遺構精査、掘削。遺構配置図作成。調査区北の西から中央で幅1mほどの溝を検出していたが、一部断ち割った結果、複数の素掘溝が重複している可能性が高くなり、坪界溝である可能性が低くなった。

12月5日(水)

遺構掘削(素掘溝多数)。遺構配置図作成。

12月6日(木)

遺構精査、掘削(素掘溝多数)。遺構配置図作成。調査区北部に数本の素掘溝(南北方向)を切る幅約6mほどになる東西溝(落ち・南側の肩)を検出した。

12月7日(金)

遺構掘削(素掘溝多数)。遺構配置図作成。

12月10日(月)

遺構精査、掘削(素掘溝多数)。調査区内全精査終了。遺構配置図作成。調査区北側の素掘溝の掘削開始。

12月11日(火)

遺構掘削(素掘溝及び素掘溝の畦)。全素掘溝掘削終了。遺構配置図作成。

12月12日(水)

掘削(溝の畦除去)。遺構配置図作成。遺物取り上げ開始。遺物出土状況の写真撮影。

12月14日(金)

畦除去(素掘溝多数)。遺構配置図完成。遺物取り上げ。遺物出土状況の写真撮影。

12月17日(月)

素掘溝畦除去。遺物取り上げ。掘り残しの素掘溝掘削、図面の修正。

12月18日(火)

素掘溝畦除去。ピット一段下げ。遺物取り上げ。遺物出土状況の写真撮影。調査区北側に土置場(県の調査予定地)確保。

12月19日(水)

素掘溝畦除去。ピット一段下げ。遺物取り上げ。遺物出土状況の写真撮影。

12月20日(木)

素掘溝畦除去。ピット一段下げ。遺物取り上げ。遺物出土状況の写真撮影。

12月25日(火)

素掘溝畦除去。午後2時以降の降雨により作業中止。

12月26日(水)

素掘溝畦除去。遺物取り上げ。遺物出土状況の写真撮影。

12月27日(木)

素掘溝畦除去。遺構1段下げ。遺物取り上げ。道具の片付け、シート養生。

12月28日(金)

遺物取り上げ。調査区周辺及びプレハブと道具小屋の清掃、シート養生。午前中で作業終了。

平成14(2002)年

1月7日(月)

シート外し、土のうとシートの片付け。空撮のための精査開始。遺物取り上げ。

1月8日(火)

空撮のための精査。遺物取り上げ。調査区北側の建物(3×4間)の西隣にもう1棟(2×3間)、建物を確認。

1月9日(水)

空撮のための精査。遺物取り上げ。建物(3×4間)の周辺から特に南側から多くの柱穴を確認。

1月10日(木)

空撮のための精査。遺物取り上げ。遺構配置図作成。

1月11日(金)

空撮のための精査完了。地上からの写真撮影。

1月15日(火)

写真撮影。

1月17日(木)

空撮。調査区内の排水。

1月18日(金)

写真撮影。

1月21日(月)

写真撮影終了。包含層掘り下げ。

1月22日(火)

包含層掘り下げ。下層遺構検出(素掘溝多数)。柱穴断削。旧河道のぬかるみと考えられる北西部の遺構を掘削開始。10cm下ほどから南北方向の素掘溝を検出。

1月23日(水)

包含層掘り下げ。下層遺構検出。柱穴断削。柱穴土層断面図作成。

1月24日(木)

包含層掘り下げ。下層遺構検出。柱穴断削。柱穴土層断面図作成、写真撮影。

1月25日(金)

包含層掘り下げ。下層遺構検出。柱穴断削。柱穴土層断面図作成、写真撮影。調査区北部のSX-05下より3本の東西溝を確認。この3本の溝幅はあわせて1.3mほどで、調査区北の東西溝(これも3本)とほぼ同じ幅である。

1月28日(月)

包含層掘り下げ。下層遺構検出。柱穴土層断面図作成、写真撮影。SX-01掘削上層より青磁片(底部)出土。掘削の結果、土坑である可能性が高くなる。

1月29日(火)

包含層掘り下げ。下層遺構検出・精査。SX-01土層断面図作成、写真撮影、完掘。SK-01掘削開始。旧河道及び調査区北部の東西溝(坪界溝か)の土層断面図作成。下層遺構配置図作成開始。

1月30日(水)

下層遺構検出。素掘溝掘削。下層遺構配置図作成。

1月31日(木)

遺構配置図作成。素掘溝掘削。

2月1日(金)

素掘溝掘削。遺構配置図作成(SX-10、調査区北部の東西溝部分、全体)。写真撮影(SX-10遺物出土状態、SE-01完掘状態)。ST-01掘削開始、木棺材出土。

2月4日(月)

素掘溝掘削。ST-01、SK掘削。SX-10、調査区北東西溝部分平面図作成。ST-01土層断面写真撮影。包含層掘削。

2月5日(火)

写真撮影(調査区北部東西溝内の遺物出土状況及び柱土層断面、SX-10(北・西から追加)、ST-01土層断面)。調査区北部の中央から東にかけての包含層掘削。

2月6日(水)

遺構精査、河の氾濫もしくは溝の南片を確認。SK-01土層断面写真撮影、土層断面図作成。ST-01東西、南北土層断面図作成。調査区北部、東西溝集合平面図作成。

2月7日(木)

SE-02、ST-01掘削。旧河道の氾濫と考えられる砂、赤褐色粘質土を掘削開始。調査区北側素掘溝断面実測。

2月8日(金)

旧河道氾濫部分掘削(石包丁、縄文土器深鉢(後期後半)出土)。ST-01趾除去(頭が骨の南側より玉2点出土)。SE-02完掘状況写真撮影。調査区北側溝集合実測。SX-10遺物取り上げ、遺物下の遺物を検出。

2月12日(火)

河道掘削。ST-01掘削(玉6点出土、その他に歯らしきもの数点、頭付らしき骨の南側から出土)。ST-01土器出土状況写真撮影。調査区北側溝断面実測。

2月13日(水)

河道掘削。SX-10土器出土状況実測。調査区北側溝集合実測。

2月14日(木)

旧河道掘り下げ。調査区中央部から南北方向の幅1m弱の溝検出。

2月15日(金)

旧河道掘削。調査区北側溝断面図作成。

2月18日(月)

旧河道掘削。前回、確認していた南北溝の他に、幅1m強ほどの溝も検出。調査区内を南北に走るが、中央付近で西へと曲がる可能性がある。

2月19日(火)

河道掘削。調査区西側の南北にわたる落ちは溝になる。西肩は途中で壁面へと消えていく。また、北側では西側へ曲がる。SX-10遺物取り上げ。

2月20日(水)

調査区西端の溝掘削。溝の中ほどから高坏の脚部出土。SX-10完掘状況、ST-01遺物出土状況写真撮影。調査区北部の坪界溝の土層断面図作成。遺物取り上げ。

2月21日(木)

調査区西端の溝掘削。包含層及び旧河道氾濫掘り下げ。ST-01平面図実測。SB-12柱穴土層断面図作成。SX-02、04、05掘削。SX-05土層断面図・平面図作成。

2月22日(金)

包含層・旧河道氾濫掘り下げ。ST-01平面図作成。SB-12柱穴土層断面図及び写真撮影。

2月25日(月)

包含層掘削。調査区中央の南北に位置する溝断削、弥生土器多数出土。調査区中央東側で検出した土坑平截、中世のものと考えられる。

2月26日(火)

包含層掘削。調査区中央で北西方向に位置する溝を確認。幅1mほどで深さは30cmほどである。拡張区では、調査区西端で確認していた溝を切る形で古墳時代と考えられる溝又は落ちを確認。

2月27日(水)

包含層掘削終了。精査開始。調査区拡張区より南側より柱穴多数検出。少なくとも2棟ほどの建物があった可能性が考えられる。

3月1日(金)

遺構精査。下層遺構(溝)掘削開始。柱穴及び素掘溝掘削。下層遺構配置図作成。

3月4日(月)

溝掘削。柱穴及び素掘溝の残りを掘削。下層遺構配置図作成。

3月5日(火)

調査区南部の溝a、b及びbのたまりを完掘。溝bのたまりと考えられていた遺構は、SD-bを掘り込んだ別の遺構と考えられる。この遺構の時期はSD-aの時期(古墳時代前期)とほぼ同時期のものと考えられる。旧河道の氾濫部分掘削開始。SD-c[拡張部]とその続きを掘削。

3月6日(水)

調査区全面の排水。SD-b、南北方向の旧河道を掘削。SD-cの北西隅を残し完掘。ST-01(屋敷敷)完掘。SK-02完掘状況写真撮影。

3月7日(木)

SD-b掘削。SD-c土層断面図作成、写真撮影。東西畦のSD-bおち、SD-aの土層断面図作成、写真作成。ST-01完掘状況写真撮影。

3月8日(金)

SD-b完掘。SD-c、調査区東西畦除去。調査区北部杭撤去。

3月11日(月)

SD-a畦、SD-d北畦、SK-03、04土層断面図作成、写真撮影。調査区南北畦土層断面図作成。調査区東端より精査開始。

3月12日(火)

SD-d完掘。調査区北壁の土層断面図作成、写真撮影。SK-05遺物出土状況図、土層断面図作成。SD-bたまりの北側の遺物出土状況図作成開始。調査区東部・西部の精査。

3月13日(水)

SK-05完掘及び遺物出土状況・土層断面写真撮影。SD-a、cの土層断面写真撮影。調査区中央まで精査。SD-a、bの遺物出土状況図作成。

3月14日(木)

SD-a、b、SD-bのたまり土層断面図及び写真撮影。SD-bのたまりテラス部遺物出土状況写真撮影。調査区南部まで精査終了。

3月15日(金)

SD-a、b畦除去。SD-bテラス部の遺物取り上げ。写真撮影。調査区周辺の片付け。

3月18日(月)

調査区全景の写真撮影。調査区周辺の清掃。

3月19日(火)

空撮のため調査区周辺の片付け、正午より空撮。旧河道の断削。道具の片付け。

3月20日(水)

旧河道の掘削、土層断面図作成。調査区北西隅の土層断面図作成。プレハブ内の片付け、電源撤去。

3月22日(金)

旧河道、「L」字形溝合流部分土層断面図作成。重機3台搬入、調査区内埋め戻し開始。道具片付け。

3月25日(月)

調査区埋め戻し。調査区北西部拡張により下層の溝の延長を確認。ベルトコンベア撤去、道具撤去。調査区北の拡張部分で坪界溝と考えられる埋土灰色粘土の溝を検出。調査区北西部の拡張では、SD-c、dの延長及びそれらに切られている新しい溝を検出。

3月26日(火)

調査区内埋め戻し。調査区北西拡張部で検出したSD-c、d溝掘削。SD-cより遺物は出土しなかつ

たが、それを切っているSD-dより古墳時代前期の狭もしくは小型丸底壺が出土した。

3月27日(水)

土層断面図作成。

3月28日(木)

調査区埋め戻し完了。重機搬出、プレハブ・備品撤去。

3月29日(金)

残りの道具を片付け、撤去完了。本日で調査終了。

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

橿原市は、奈良盆地の南部に位置し、北は田原本町、広陵町、南は明日香村、高取町、御所市、東は桜井市、西は大和高田市に接している。調査地の含まれる曲川遺跡は、橿原市内の西部に位置し、大和高田市との市境に近接する。遺跡の範囲は本報告で扱う橿教委 2001—8 次調査の後に変更されており、令和 5（2023）年 12 月現在、南北約 900 m、東西約 800 m の範囲に及ぶ。現在の行政区分では、橿原市曲川町、新堂町、雲梯町、忌部町に該当する。

橿原市は奈良盆地の南部から中央に向かって緩やかに標高が低くなる地形である。調査地一帯も南から北に向かってやや標高が低くなる。調査地は平地（沖積地）に位置し、一帯の標高は約 61～62 m である。また、調査地一帯の東側では、龍門山地西部に源流を持つ曾我川、西側では金剛山地に源流を持つ葛城川が北流し、曲川遺跡はその間の微高地に位置している。ただし、これまでの発掘調査成果や地名、地割から、曲川遺跡の周辺では度々河川が位置を変えていた様子がうかがえる。

調査地は、曲川遺跡の南端に位置している。調査地一帯は主に耕作地として利用されており、条里地割を踏襲した土地区画のもと水田耕作が行われている。ただし、調査地の西側隣接地では、根成柿（大和高田市）から曲川（橿原市）にかけて、土地区画に乱れが見られ、南南西—北北東に流下する旧河道の痕跡が確認できる。現在の土地区画もこの旧河道の痕跡に制約を受けている。

なお、『大和国条里復原図』による調査地の小字名は「平ヶ坪」・「馬場」である。

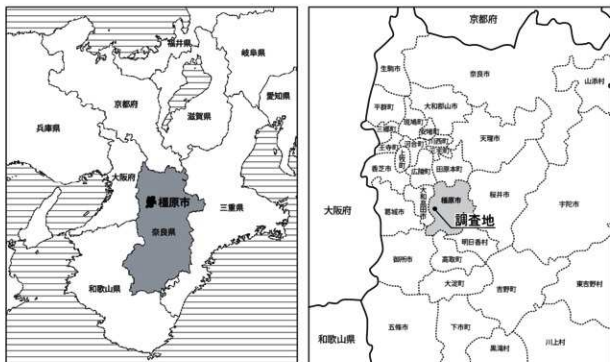


図1 調査地位置図

## 第2節 歴史的環境

橿原市西部の調査地一帯は、近年まで面的な発掘調査が極めて少なく、当該地域の歴史的な変遷は明らかでない部分が多かった。しかし、京奈和自動車道建設や大型商業施設、工場建設に伴う発掘調査例が急激に増加し、京奈和自動車道一帯を中心に、遺跡の範囲や動向が明らかになってきた部分が多い。

調査地の位置する曲川遺跡周辺で最も古い遺跡は、縄文時代中期の遺物包含層が確認された西曾我遺跡である。縄文時代後期になると、東坊城遺跡で縄文時代後期～晩期の遺物を含む河川が確認されている。縄文時代晩期になると、遺物・遺構数は更に増加し、曲川遺跡で縄文時代晩期の土器棺墓が確認されている。曲川遺跡では他に、竪穴住居、土塚墓、貯蔵穴、炉、河川が検出され、当時の集落の構成を知ることができ、遺跡の規模・内容ともに西日本を代表する縄文遺跡の一つと言える。なお、曲川遺跡の周辺に目を向けると、同時期の遺跡には、土器棺墓や貯蔵穴、水場遺構のある新堂遺跡、葬送関連の遺構が確認されている西坊城遺跡（大和高田市）、縄文時代晩期の土坑が存在する東坊城遺跡、クリ林が確認された観音寺本馬遺跡がある。

弥生時代になると、曲川遺跡の立地する曾我・葛城川流域には多くの遺跡が展開する。曾我川流域の一町遺跡は、前期から後期まで活動が継続する拠点集落であり、竪穴住居、土坑、溝などが確認されている。一町遺跡周辺では、弥生時代後期の高地性集落である上ノ山遺跡や忌部山遺跡の存在が知られている。同じく曾我川流域に位置する中曾司遺跡も拠点集落の1つであり、弥生時代を通じて遺構が確認されている。また、土橋遺跡や観音寺本馬遺跡では方形周溝墓群が造営されており、曲川遺跡の北西部でも弥生時代中期の大規模な周溝墓群が展開する。このほか、萩之本遺跡では、弥生時代前期に遡る大規模な水田や灌漑施設が検出されている。

弥生時代末から古墳時代初頭にかけては曲川遺跡内の遺構の数が減少するが、前述の弥生時代中期の周溝墓の南西側で方形周溝墓が確認されている。また、曲川遺跡の南西隣に位置する新堂遺跡では竪穴住居や水田が検出されており、居住域としての利用が活発化している。

古墳時代前期後半には、曲川古墳群の築造が開始され、中期まで続く。近年、発掘調査事例の増加に伴い、曲川古墳群以外にも、四条古墳群や松塚北浦遺跡（大和高田市）、三倉堂遺跡（大和高田市）で多数の埋没古墳が確認されており、古墳時代を通して奈良盆地の低地部でも古墳の築造が行われていたようである。

古墳時代中期に入ると、曾我川流域における遺跡の状況は大きく変化する。曲川遺跡や新堂遺跡では、近年の発掘調査で、陶質土器、韓式系土器などの渡来系遺物が多量に出土している。このほか、輪の羽口や鉄滓などの鉄器生産に関わる遺物や祭祀具、馬歯や製塩土器など馬匹飼養に関連する遺物が出土している。渡来系遺物が出土したことで知られる新沢千塚126号墳を含む新沢千塚古墳群の築造も、古墳時代中期～後期に集中する。また、古墳時代中期～後期に玉作りを専門的に行ったことで有名な曾我遺跡は、曲川遺跡の北東に位置しており、橿原市西～南部一帯で、新たな技術の導入や生産に関わる体制の変化などが起きている。

飛鳥時代から平安時代前期にかけては、曲川遺跡周辺での活動を示す遺跡・遺構は極めて希薄である。飛鳥時代のおわりに造営された藤原京は、曲川遺跡の東方約1kmの地点に西京極が想定される。



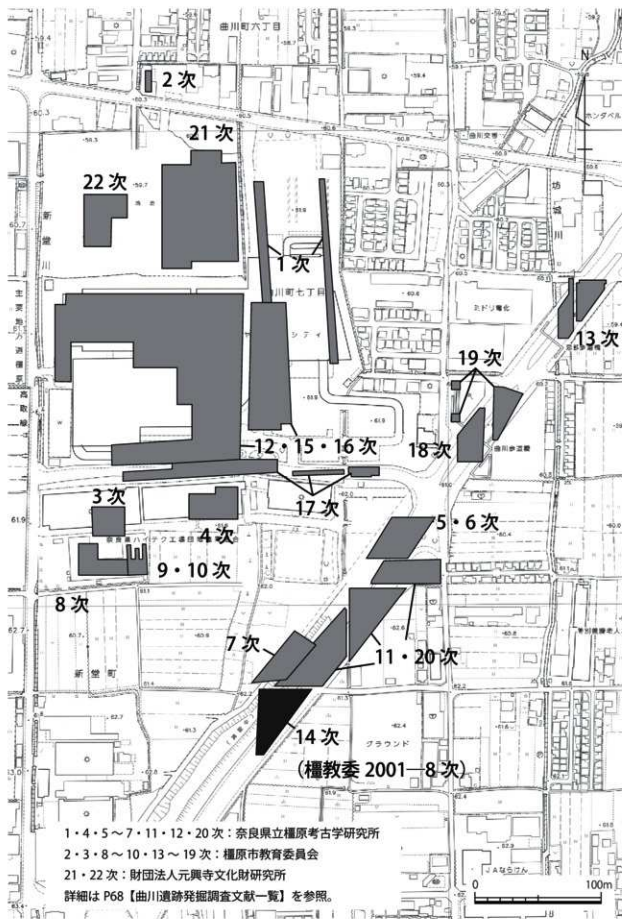


図3 調査地周辺の地形と曲川遺跡の発掘調査地点（S = 1/3,000）



また、曲川遺跡の北側には横大路が通るが、同時期の遺構・遺物はほぼ無く、曲川遺跡の状況は不明である。

この地域で再びまとまった遺構が確認されるのは、平安時代中期以降である。京奈和自動車道建設に伴う一連の発掘調査では、曲川遺跡から新堂遺跡一帯にかけて、中世を中心とする屋敷や集落に関連する遺構が多数確認されている。曲川遺跡の北半の調査では、9世紀末～10世紀頃の遺構、遺物が複数確認されている。遺構は建物や井戸など生活に関わるものが主であり、平安時代中期に居住地としての利用が再開される。

平安時代後期になると、活動の範囲は大きく拡大し、平安時代後期から鎌倉時代の集落や屋敷が展開する。また、平安時代後期から鎌倉時代にかけての河道が複数箇所を確認されており、第1節で触れた旧河道の痕跡と同一のものである。新堂遺跡の南端で行われた調査では、この河道が13世紀前半に埋没したことが判明しており、中世前期には河道の周辺に複数の集落・屋敷地が広がっていたようである。この旧河道の痕跡に関連する記録としては、明応6(1497)年作成の談山神社所蔵『忌部庄差図』が挙げられる。差図には「葛上道」と添え書きされた斜行線が確認できる。地割の乱れなどから、この旧河道の痕跡に沿って道が延びていたと考えられ、曲川周辺と葛城を結ぶ道であった可能性が高い。なお、室町時代の記録からは、曲川一帯には「曲川庄」や「曲川北庄」などの一乗院を含む興福寺関連の荘園が存在したことがわかっているが、その実態は不明な部分が多い。同時期の遺跡としては、東坊城遺跡が知られる。建物跡などの遺構が確認されており、橿原市南西部で平安時代後期から鎌倉時代にかけて開発が盛んに行われたことは想像に難くない。

その後、これらの集落・屋敷地は鎌倉時代中期ごろまでに廃絶している。室町時代の屋敷地が曲川遺跡で確認されているが、鎌倉時代までの屋敷地との連続性は不明である。一方で、現在も集落としてのまとまりを持つ東坊城・曲川・新堂などの環濠集落の始まりは中世まで遡ると考えられ、平安時代後期から鎌倉時代の集落・屋敷地の廃絶後は、曲川遺跡一帯は耕作地としての利用に転換し、現代の耕作地まで続いている。

#### 【参考文献】

- 改訂橿原市史編纂委員会 1987『橿原市史』橿原市役所
- 奈良県立橿原考古学研究所編 1980『大和国条里復原図』奈良県教育委員会
- 北山峰生・松井一兎 2005『曲川遺跡』（奈良県立橿原考古学研究所調査報告集第90冊）奈良県立橿原考古学研究所
- 船染紀子・佐藤重聖・坪井清足・辻本裕也・藤井章徳 2006『曲川遺跡発掘調査報告書（2004年度調査）』財団法人元興寺文化財研究所
- 佐々木好直・金原正明 2007『曲川遺跡Ⅱ』（奈良県文化財調査報告書第120集）奈良県立橿原考古学研究所
- 平岩欣太・寛和也 2012『曲川遺跡』橿原市教育委員会

## 第三章 調査の成果

### 第1節 調査の方法

#### 調査区の位置と形状

調査地は、調査開始時点では道路用地として盛土造成が行われた状態であったが、それ以前は水田として利用されていた。調査区の西約240mには県道35号線が南北に走る。調査地は、曲川遺跡の南端に位置している。

調査区の形状は、南北に長い直角三角形で、西辺で一部拡張を行っている。調査区は北で東に5°程度傾く。調査区の規模は東西約63m・南北約83m・面積3,000㎡を測る。

#### 調査の手順

上層遺構面直上まで重機による掘削を行い、それ以降は人力で遺構検出・掘削を行った。ただし、調査の最終段階において、旧河道の堆積状況を確認するために重機による断割りを行った。また、調査区の壁面に沿って人力で排水溝を掘削した。

#### 遺構名

遺構名については、調査時、年報（『かしはらの歴史を探る11』）、本報告で使用する名称が異なる。整理作業段階で、遺構名の重複の確認や遺構種別に対する認識の変化があったためである。

調査段階では遺構の種別毎に1から遺構番号を付与し、遺構種別を表すアルファベットと組み合わせて遺構名としている。本報告では遺構種別を問わず、1から順に遺構番号を付与しうえて、遺構種別を表すアルファベットと遺構番号を組み合わせて遺構名とした。本報告では、混乱を防ぐため、各段階の遺構名を記載した対応表（表1・2）を作成した。詳しくはそちらを参照されたい。

表1 遺構名対応表①

調査時	年報	本書
SD-a	SD-01	SD27
SD-b	SD-04	SD30
SD-bたまり	SK-06	SK31
SD-c	SD-03	SD28
SD-d	SD-02	SD29
SD-e	-----	-----
SK-05	SK-07	SK32
SX-06	SX-02（西側中央）	SX33
SD-101	-----	SD13
SD-333	-----	SD14
SD-334	-----	SD15
旧河道	旧河道	旧河道
SX-01	SK-01	SX22
SX-02	SK-05	SX24
SX-04	SK-04	SX23
SX-05	-----	SX25
SX-10	SX-01	SX18
坪界溝	坪界溝	坪界溝
SX-05(整地土)	整地土	SX26
P52	-----	SP52
SK-02	SK-03	SK19
SK-03	-----	SK20
SK-04	-----	SK21
SE-01	SE-01	SE16
SE-02	SE-02	SE17
ST-01	ST-01	ST01
SB-01	SB-01	SB02
SB-02	SB-02	SB03
SB-03	SB-03	SB04
SB-04	SB-04	SB05
SB-05	SB-05	SB06
SB-06	SB-06	SB07
SB-07	SB-07	SB08
SB-08（欠番）	-----	-----
SB-09	SB-08	SB09
SB-10	SB-09	SB10
SB-11	-----	SB11
SB-12	SB-10	SB12

## 写真撮影

調査写真の撮影は、遺構の検出・完掘や土層の堆積状況、遺物の出土状況など、記録保存において必要とされた段階で、調査担当者が適宜撮影を行った。撮影の際に使用したフィルムは、4×5インチサイズの白黒フィルムとカラーポジフィルム、35mmサイズの同フィルムである。

航空写真については、株式会社アイシーに写真撮影を委託し、上層遺構完掘時及び下層遺構完掘時の2回に分けて撮影を行った。

主要な写真については、デジタルデータでの保存も行っている。

表2 遺構名対応表②

SB	本書	調査時	SB	本書	調査時	SB	本書	調査時	SB	本書	調査時	SB	本書	調査時	SB	本書	調査時
02	101	P-019	03	119	P-066	04	137	P-104	06	155	P-075	09	173	P-109	10	191	—
	102	P-020		120	P-067		138	P-105		156	P-076		174	P-110		192	—
	103	P-021		121	P-068		139	P-106	157	P-126	175	P-111	193	—			
	104	P-022	122	P-069	140	P-107	158	P-082	176	P-112	194	—					
	105	P-023	123	P-070	141	P-108	159	P-083	177	P-113	195	P-121					
	106	P-024	124	P-071	142	—	160	P-085	178	P-114	196	P-122					
	107	P-036	125	P-072	143	P-011	161	P-086	179	P-115	197	P-123					
	108	P-055	126	P-093	144	P-078	162	P-087	180	P-116	198	P-124					
	109	P-056	127	P-094	145	P-079	163	P-088	181	P-117	199	P-125					
	110	P-057	128	P-095	146	P-081	164	P-089	182	P-118	200	P-126					
	111	P-058	129	P-096	147	P-080	165	P-090	183	P-119	201	P-127					
	112	P-059	130	P-097	148	P-077	166	P-091	184	P-120	202	P-128					
	113	P-060	04	131	P-098	149	P-014	167	P-092	185	—	203	P-129				
	114	P-061	132	P-099	150	P-015	168	P-093	186	—	204	P-130					
	115	P-063	133	P-100	06	151	P-016	169	—	187	—	205	P-131				
	116	P-064	134	P-101	07	152	P-017	170	—	188	—	206	P-132				
03	117	P-062	135	P-102	153	P-073	171	—	189	—	207	P-133					
	118	P-065	136	P-103	154	P-074	172	—	190	—	208	P-506					
											209	—					

## 第2節 基本層序

基本層序は以下の通りである。以下に述べる各層序は、主に調査区北壁及び調査区西壁で確認した内容である。調査時には調査区北壁の2カ所（北西隅・中央部）と調査区西壁の2カ所（南部、拡張部付近）で、部分的に記録を作成している。

なお、調査時の基本層序については、整理作業時に再度検討を行った。その結果、以下の層序に大別できたが、基本層序Ⅲ・Ⅳ層と土層断面図で確認できる各層には、対応関係を明確にできない部分が多い。

### 基本層序

Ⅰ層：造成土（現代。上面高は標高約61.2～61.4m。厚さ約0.05～0.2m。）

Ⅱ層：水田耕作土（現代。床土を含む。上面高は約61.1～61.2m。厚さ約0.1～0.3m。）

Ⅲ層：旧耕作土（平安時代後期以降の耕作層。上面高は約60.9～61.0m。厚さ約0.1～0.3mか。）

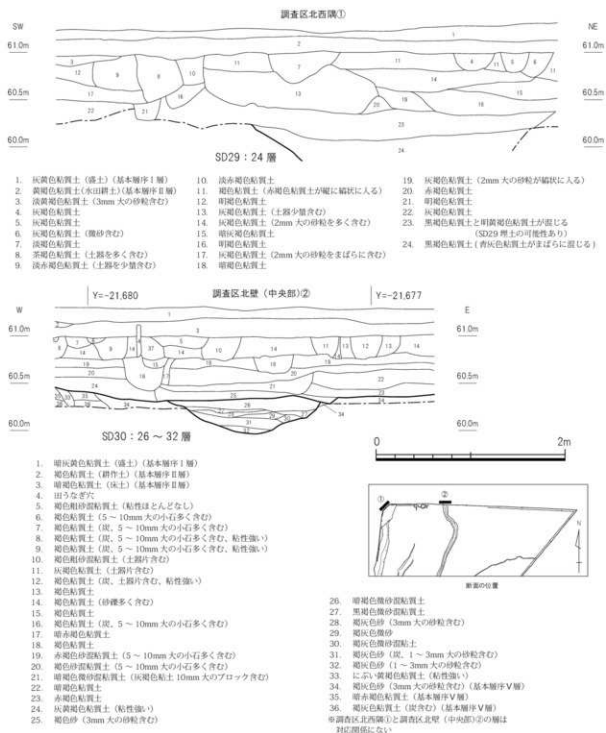


図4 調査区北壁土層断面図(S=1/40)

IV層：上層遺構基盤層（上面が上層遺構の遺構面。古墳時代中期～平安時代の自然堆積層。

調査区北側から中央にかけてのみ存在する。

上面高は約60.8～60.9m、厚さは約0.3～0.4mか。）

V層：下層遺構基盤層（上面が下層遺構の遺構面。上面高は約60.4～60.5m。

厚さ約0.1m以上。）

図4・5に調査区北壁及び西壁の土層断面図を示している。III・IV層については、前述の通り、各層と基本層序の対応関係が不明であるため、推定できる範囲で基本層序の厚さを示している。

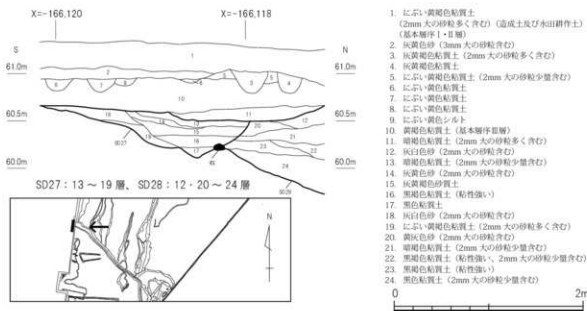


図5 調査区西壁土層断面図 (S = 1/40)

I層(図4-①-1・②-1、図5-1層)は、現代の造成土である。灰黄色粘質土からなる。上面の標高は約61.2～61.4mである。京奈和自動車道建設にあたり、道路用地として利用するために搬入された盛土である。

II層(図4-①-2・②-2・3層、図5-2層)は、江戸時代以降の水田耕作土である。黄褐色粘質土・淡褐色粘質土からなる。一部に床土を含む。上面の標高は約61.1～61.2mである。

III層(図5-10層)は、平安時代後期以降の耕作層である。いわゆる耕作溝の埋土もこれに含む。上面の標高は約60.9～61.0mである。褐色粘質土からなる層が多く、一部の層では、下層の河川堆積に由来すると考えられる砂礫を多く含む。IV層上面との境が不明であるため、正確な厚さは不明であるが、遺構面の検出高などから推定すると、厚さ0.1～0.3m程度であると考えられる。

IV層は、弥生時代中期～古墳時代前期の段階で堆積した自然堆積層である。明褐色砂質土や灰褐色粘質土からなり、河川の氾濫によって堆積した可能性が高い。調査区北側から中央にかけての範囲に存在する。建物などの上層遺構はこの層の上から切り込んでいる。上層遺構の検出高は約60.8～60.9mであり、IV層の上面高もこれに前後すると考えられる。ただし、柱穴などの検出状況から、後世の耕作活動、もしくは調査開始時の重機掘削によって遺構面が削平されている可能性が高い。調査時には、旧河道(第Ⅱ章第3節で後述する遺構「旧河道」とは異なる)の氾濫層として掘削を行っており、弥生時代中期～古墳時代前期の遺物が出土している。

V層(図4-②-33～36層)は、弥生時代以前の自然堆積層である。上面が下層遺構の遺構面である。確認できる上面の標高は約60.4～60.5mである。褐色砂などからなる。

なお、北側隣接地の7次調査(奈良県立橿原考古学研究所2007『曲川遺跡Ⅱ』)及び11・20次調査(奈良県立橿原考古学研究所2004『曲川遺跡』)において、標高約59.8～60.2mの高さで縄文時代後期～晩期の遺構を検出している。橿教委2001～8次調査において土層の記録が確認できる最深の掘削深度は、北壁側溝部分の標高約60.2mである。このため、本調査の掘削深度より更に下層に縄文時代の遺構面が存在する可能性がある。

### 第3節 遺構

遺構は大きく3つの時期に分けることができ、平安時代中期～平安時代後期と古墳時代中期、弥生時代後期の遺構が存在する。

調査時には、平安時代中期以降の遺構を上層、古墳時代以前の遺構を下層として調査・記録を行っている。上層は、耕作溝、建物、木棺墓、井戸等などの遺構からなり、11世紀後半から12世紀を中心とする。下層は、溝及び土坑からなり、時期は弥生時代後期及び古墳時代中期である。以下、上層から順に遺構の概要を述べる。

なお、今回取り扱う遺構については、遺構の重複関係における時期の前後など、やや不明瞭な部分があるが、できる限り現地調査担当者の見解に従う。また、同じ遺構において断面図と平面図の形状が一致しなかったものもあるが、修正が困難であったためそのまま掲載する。遺構の断面図については、座標値を記入するなど出来る限り正確な位置を示しているが、一部図面についてはおおよその位置を示すに留まったものもある。ただし、整理作業段階で検討した点については、適宜追記する。

#### 上層遺構

上層遺構は、耕作溝と建物や屋敷の区画溝など屋敷地として利用された時期の遺構からなる。時期は平安時代後期を中心とするが、一部平安時代中期に遡る遺構も存在する。

**耕作溝 (図6)** 耕作溝は、調査区全域に分布する素掘りの溝である。東西・南北方向の2方向の溝が存在する。南北方向の溝には、N-2°-WとN-4°-Eの2つの方位のものがあり、遺構の重複関係から前者の方が古い。また、東西・南北方向の溝と前後関係から少なくとも4段階の耕作時期が考えられる。さらに、建物等の遺構とも重複関係にあり、耕作地として開発された後、11世紀～12世紀にかけて屋敷地として利用され、再度耕作地化している。ただしSB06・07は耕作溝より古い遺構である可能性が高い。遺構の時期は11世紀以降である。

耕作溝からは、土師器、瓦器、須恵器、弥生土器などが出土している。大部分は屋敷地として利用されていた時期の遺構や弥生時代後期から古墳時代中期にかけての下層遺構に由来すると考えられる。

**ST01 (図8)** 調査区北東部に位置する木棺墓である。平面形は南北に長い隅丸長方形である。墓壇の規模は、長辺2.2m、短辺0.6mを測る。深さ0.25mを残す。人骨の検出状況から、頭部を北にして埋葬している。墓壇底部には、棒状の木材が敷かれており、頭部付近のみ板材を使用する。木材を検出したのは墓壇底部のみであるが、土層の堆積状況から、棒・板状の部材を組み合わせた箱形の棺を墓壇に埋納した可能性が高い。頭骨、歯、骨盤、大腿骨を検出したが、腐食が進んでおり、年齢・性別などは不明である。詳しくは第4章第2節に述べる。

出土遺物には、土師器皿、ガラス玉がある。土師器皿は墓壇の側面に立てかけられた状態で出土した。ガラス玉は頭部付近から出土した。一部は並んで出土しており、糸を孔に通した状態で埋納した可能性がある。土器から、遺構の時期は11世紀中葉と考えられる。

**SB02 (図9)** 調査区中央やや北寄りに位置する底付掘立柱建物である。梁間3間(6.8m)×桁行



図6 上層遺構配置図 (S = 1/500)

4間(8.0m)の南北棟で、底を南面に設ける。柱間は、梁間約2.0~2.4m、桁行約2.0mを測る。柱穴掘方の平面形は円形もしくは不整形円で、直径約0.25~0.55m、深さ約0.1~0.4mを残す。一部の柱穴で柱跡を確認できる。SB03とほぼ同じ場所に位置するが、柱穴の重複関係はなく、時期の前後関係は不明である。柱穴からは瓦器などの土器の細片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

**SB03(図9)** 調査区中央やや北寄りに位置する掘立柱建物である。梁間2間(3.6m)×桁行3間(5.8m)の南北棟である。柱間は、梁間・桁行ともに約1.8~2.0mを測る。柱穴掘方の平面形は円形で、

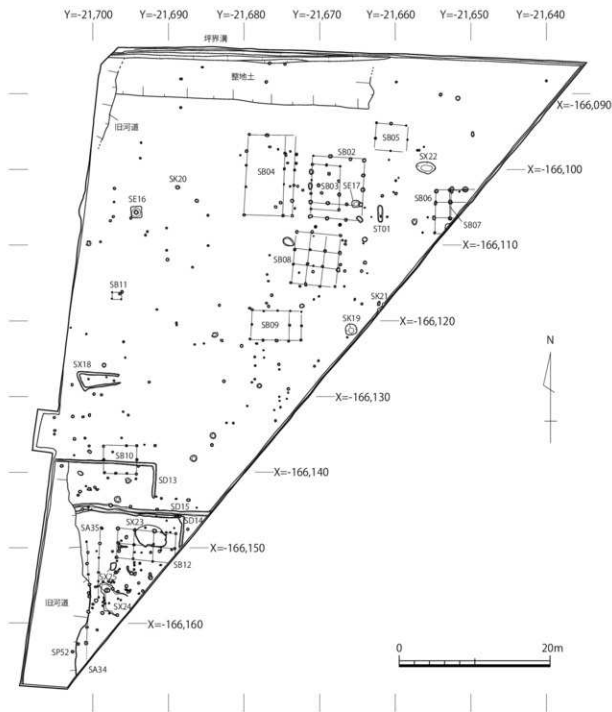


図7 上層遺構配置図(耕作溝を除く)(S=1/500)

直径約0.25～0.5 m、深さ約0.1～0.25 mを残す。位置はSB02とほぼ重なるが、重複関係はなく、前後関係は不明である。柱穴からは少量の土器が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

**SB04 (図10)** 調査区中央やや北寄りに位置する庇付掘立柱建物である。梁間2間(6.5 m)×桁行5間(10.2 m)の南北棟である。東面に庇が付く。柱間は梁間約2.4 m、桁行約2.0 mを測る。柱穴掘方下の平面形は概ね円形で、直径約0.1～0.5 m、深さ約0.1～0.25 mを残す。一部の柱穴で直径約0.1 mの柱跡を確認できる。柱穴から出土した土器はいずれも細片で詳細な時期は不明である。

**SB05 (図11)** 調査区北東に位置する掘立柱建物である。梁間2間(6.4 m)×桁行2間(5.6 m)



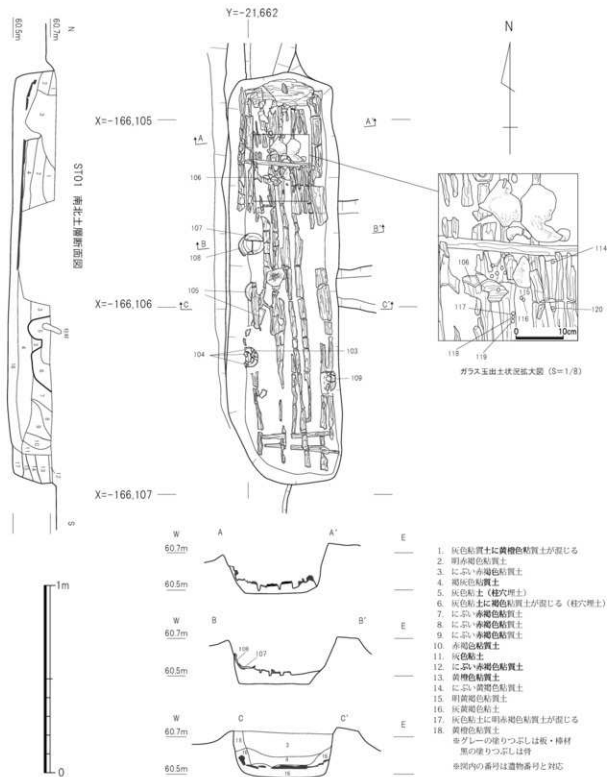
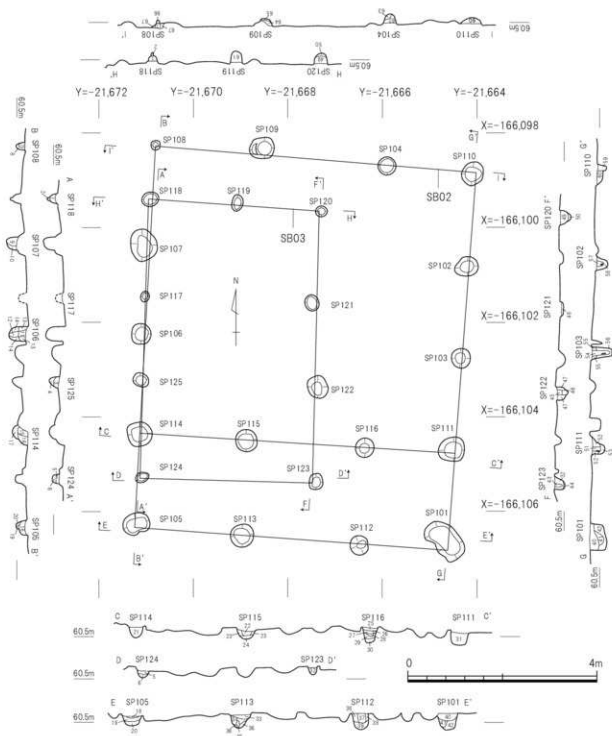


図8 ST01 遺物出土状況・断面図 (S=1/20)

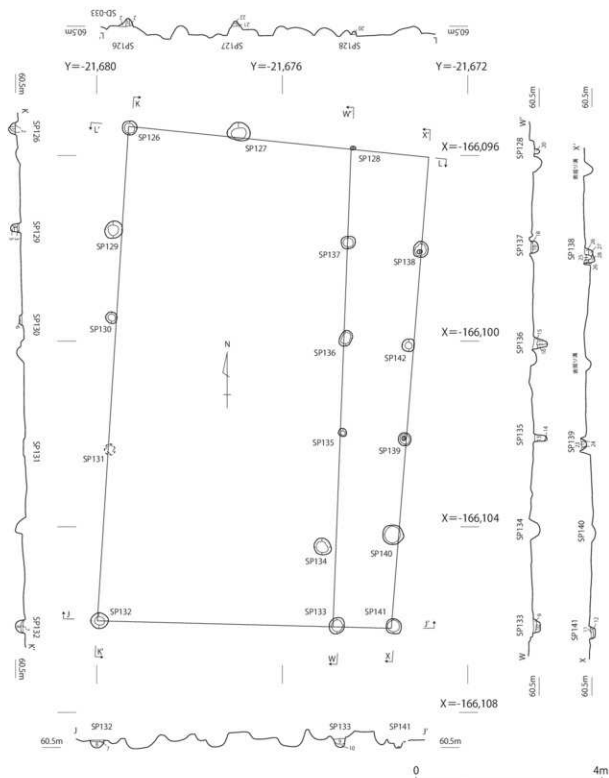
である。柱間は約2.6~3.2mを測る。柱穴掘方の平面形は円形もしくは隅丸方形で、直径約0.25~0.6m、深さ約0.15~0.4mを残す。柱穴から12世紀前半頃の瓦器塚が出土している。

**SB06 (図12)** 調査区東側に位置する掘立柱建物である。建物は調査区外に広がっており、建物の全容は不明で、東西1間(2.0m)以上×南北2間(3.6m)以上である。柱間は約2.0mである。



- |                   |                       |                        |                       |
|-------------------|-----------------------|------------------------|-----------------------|
| 1. 暗褐色粘質土         | 18. 黄褐色粘質土(砂値少)       | 35. 黄灰色粘土              | 52. 黄灰色粘土(灰黄褐色粘質土混じる) |
| 2. 灰褐色粘土          | 19. におい黄褐色粘質土         | 36. 暗灰黄色粘質土(細砂少混じる)    | 53. 黄灰色粘土(細砂少混じる)     |
| 3. 灰褐色粘土(炭化物少量含む) | 20. 褐色粘土              | 37. 灰黄褐色粘質土            | 54. 灰白色粘土             |
| 4. 黄褐色粘土          | 21. 田圃のSP114の土色を参照    | 38. 暗灰黄色粘質土            | 55. 灰白色粘土(褐色粘質土少量混じる) |
| 5. におい黄褐色粘質土      | 22. オリーブ褐色粘質土         | 39. 灰黄色粘土              | 56. 灰白色粘土(微砂少量混じる)    |
| 6. 黄褐色(黄灰)色粘質土    | 23. 褐色粘質土             | 40. におい黄褐色粘質土(炭化物少量含む) | 57. 黄灰色粘土             |
| 7. 暗褐色粘質土         | 24. におい黄褐色粘質土         | 41. 褐色粘質土              | 58. 黄灰色粘土(黄褐色粘質土混じる)  |
| 8. 灰褐色粘質土         | 25. におい黄褐色粘質土         | 42. 灰黄褐色粘質土(灰色粘土混じる)   | 59. 黄灰色粘土             |
| 9. 灰黄褐色粘土         | 26. 黄褐色粘質土(砂粒多く混じる)   | 43. 黄灰色粘土              | 60. 黄灰色粘土(褐色粘質土混じる)   |
| 10. におい黄褐色粘土      | 27. 黄褐色粘質土            | 44. 灰黄褐色粘土             | 61. 灰黄褐色粘質土           |
| 11. 灰褐色粘質土(炭化物含む) | 28. 暗オリーブ褐色粘質土        | 45. 黄灰色粘土(褐色粘質土混じる)    | 62. 暗灰黄色粘質土           |
| 12. 灰褐色粘土         | 29. オリーブ褐色粘質土         | 46. 黄灰色粘土              | 63. 灰黄色粘土             |
| 13. 黄褐色粘質土(砂粒含む)  | 30. 暗におい黄褐色粘質土        | 47. 黄褐色粘質土             | 64. 暗オリーブ褐色粘質土        |
| 14. 黄褐色粘質土        | 31. GG跡のSP111の土色を参照   | 48. 暗灰黄色粘質土            | 65. 褐色粘質土(細砂多く含む)     |
| 15. 灰褐色粘質土        | 32. 黒褐色粘質土            | 49. 暗灰黄色粘質土            | 66. 褐色粘質土             |
| 16. 黄褐色粘質土        | 33. 灰黄褐色粘質土           | 50. 灰黄色粘土              | 67. 褐色粘質土             |
| 17. 灰褐色粘土         | 34. 暗灰黄色粘質土(褐色粘質土混じる) | 51. 黄灰色粘土(有機物含む)       |                       |

図9 SB 02・03 平面・断面図 (S = 1/80)



1. 黄灰色粘質土
2. 黄灰色粘質土(砂粒少量混じる)
3. 褐色粘質土
4. 濃い黄褐色粘質土
5. 灰黄褐色粘質土
6. 褐色粘質土
7. 黄褐色粘質土
8. 濃い褐色(赤っぽい)粘質土
9. 濃い褐色(赤っぽい)粘質土
10. 灰黄褐色粘質土

11. 灰色粘土(砂粒少量含む)
12. 灰色粘土
13. 濃い黄褐色粘質土(細砂少量混じる)
14. 濃い黄褐色粘質土
15. 暗褐色粘質土(細砂少量含む)
16. 濃い黄褐色粘質土
17. 褐色粘質土
18. 黄褐色粘質土
19. 灰黄褐色粘質土
20. 濃い褐色粘質土(褐色粘質土)

21. 灰黄褐色粘土
22. 褐色粘質土
23. 灰黄褐色粘質土
24. 濃い黄褐色粘質土
25. 暗褐色粘質土
26. 暗オリーブ灰色粘質土
27. 黄灰色粘土
28. 黄灰色粘土(砂粒少量含む)

図10 SB 04 平面・断面図 (S = 1/80)

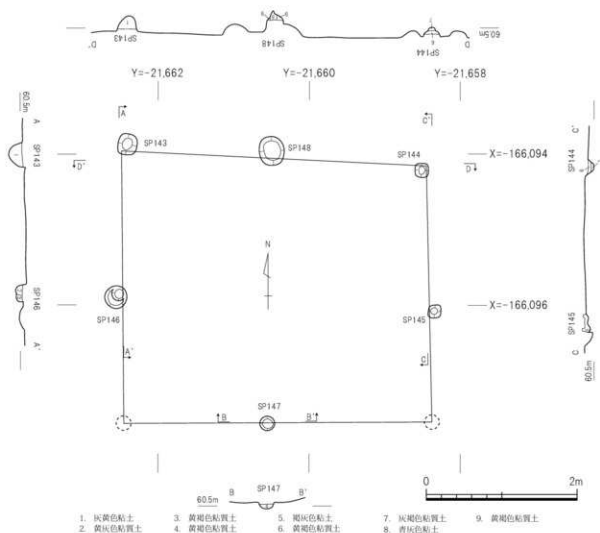


図 11 SB05 平面・断面図 (S = 1/50)

柱穴掘方の平面形は円形もしくは不整形円形で、直径約 0.3~0.5 m、深さ約 0.15~0.4 m を残す。直径約 0.1 m の柱が残存する。SB07 と重複関係にあり、SB07 よりも新しい。建物の方位は正方位に一致する。柱穴からは土師器、黒色土器などの細片が出土している。建物の時期は平安時代中期に遡ると考えられる。

**SB07 (図 12)** 調査区東側に位置する掘立柱建物である。建物は調査区外に広がっており、建物の全容は不明であるが、東西 2 間 (4.0 m) 以上、南北 3 間 (5.6 m) 以上である。柱間は約 1.6~2.0 m を測る。柱穴掘方は円形もしくは不整形円形で、直径約 0.25~0.8 m、深さ約 0.15~0.4 m を残す。柱穴から出土した土器はいずれも細片で詳細な時期は不明である。柱穴の重複関係より SB06 より古い。

**SB08 (図 13)** 調査区中央に位置する掘立柱建物である。総柱建物である。東西 3 間 (5.8 m) × 南北 3 間 (6.8 m) である。柱間は約 1.9~2.4 m を測る。柱穴掘方の平面形は概ね円形で、直径約 0.25~0.5 m、深さ約 0.1~0.4 m を残す。柱穴からは土師器、瓦器が出土した。

**SB09 (図 14)** 調査区中央に位置する掘立柱建物で東面に庇がつく。梁間 2 間 (3.9 m) × 桁行 3 間 (6.7 m) の東西棟である。柱間は、梁間約 2.0 m、桁行約 1.6 m を測る。柱穴掘方の平面形は概ね円形で、直径約 0.15 m~0.3 m、深さ約 0.1~0.3 m を残す。柱穴からはごく少量の土器が出土しているが、

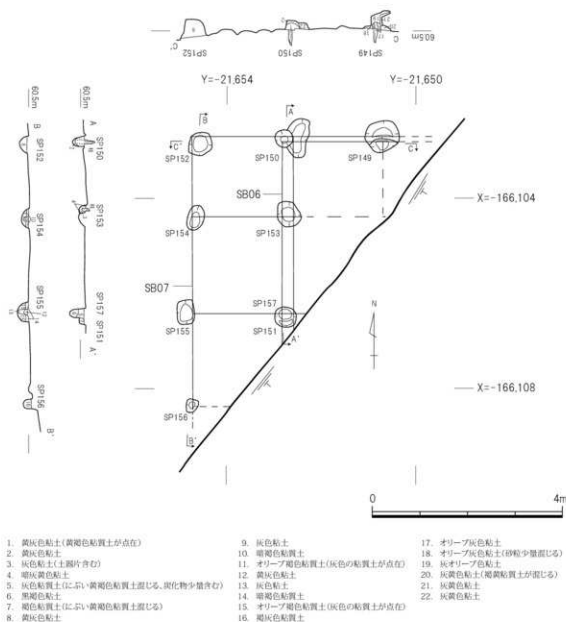


図 12 SB06・07 平面・断面図 (S = 1/80)

細片のみのため、詳細な時期は不明である。

**SB10 (図 15)** 調査区南西に位置する掘立柱建物である。梁間 2 間 (3.7 m) × 桁行 3 間 (4.3 m) の東西棟である。柱間は約 1.3~2.4 m を測る。柱穴掘方の平面形は概ね円形で、直径約 0.2~0.3 m、深さ約 0.05~0.2 m を残す。遺物は出土していない。

**SB11 (図 16)** SB11 は調査区西側に位置する掘立柱建物である。建物規模は東西 1 間 (1.1 m) × 南北 1 間 (0.8 m) で、簡易な作りの建物であったと想定できる。柱穴掘方の平面形は円形で、直径約 0.15~0.2 m、深さ約 0.1~0.3 m を残す。一部の柱穴で直径約 0.05 m の柱を検出した。柱穴からは、土師器、瓦器などの細片が出土しているが、細片のため詳細な時期は不明である。

**SB12 (図 17)** 調査区南側に位置する掘立柱建物である。建物規模は梁間 2 間 (3.8 m) × 桁行 3 間 (7.6 m) の東西棟で、総柱建物である。ただし、調査区東端で検出しており、東に向かって更に桁行が延びる可能性がある。柱間は梁間約 1.8~2.0 m、桁行約 2.1~2.8 m を測る。柱穴掘方の平面形は円形

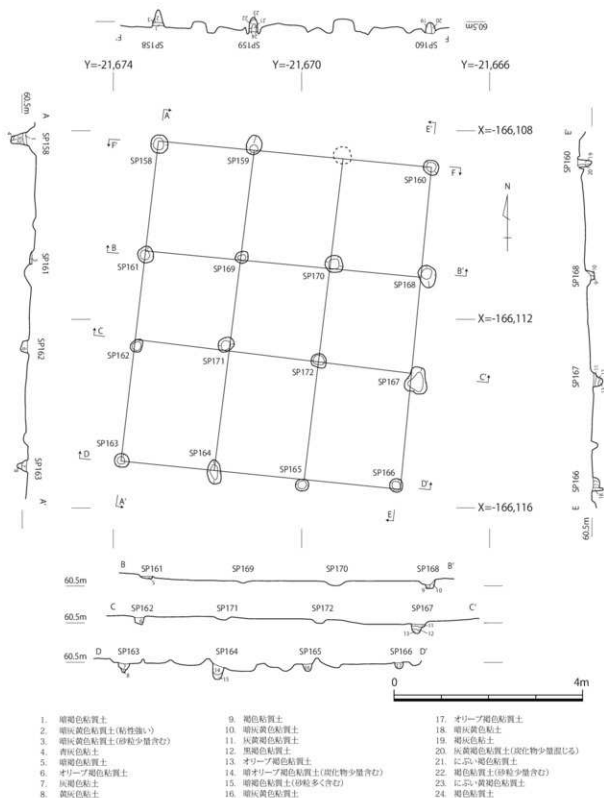


図 13 SB08 平面・断面図 (S = 1/80)

もしくは不整円形で、直径約 0.25~0.5 m、深さ約 0.1~0.4 m を残す。一部の柱穴で直径約 0.1 m の柱を検出した。柱穴からは、土師器、黒色土器の細片が出土している。

**SA34 (図 7)** 調査区南側に位置する南北方向の櫛列である。確認できる規模は南北 8 間 (13.4 m) であるが、さらに南に延びる可能性もある。後述する旧河道に沿って櫛列が設けられており、旧河道

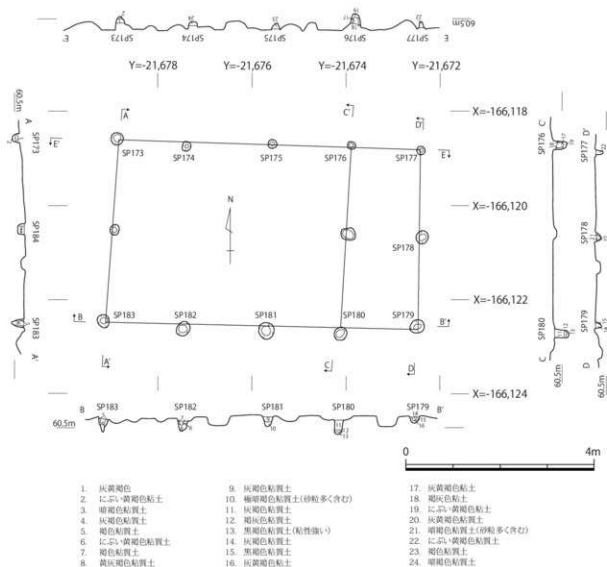


図 14 SB 09 平面・断面図 (S = 1/80)

とSB12を区画する意図があったと考えられる。柵列を構成する柱穴のうち旧河道と重複関係にある部分の柱穴は旧河道とともに埋没している。この遺構は調査終了後、整理作業中に存在を認識したため、断面図などは作成していない。

**SA35 (図 7)** 調査区南側に位置する南北方向の柵列である。規模は南北5間(10.0 m)を数える。SA34と同様に、旧河道とSB12を区画する意図があったと思われる。この遺構も調査終了後、整理作業中に存在を認識したため、断面図などは作成していない。また、SA35を構成する北側の柱穴3基については、SB12の西辺となる柱列である可能性も指摘しておく。

**SD13 (図 7)** 調査区南側を東西方向に走り、東端で南に向かって屈曲する溝である。幅約0.4 mを測る。断面図を作成していないため、断面の形状などは不明である。調査時の記録より、旧河道の最終堆積より先に埋没していると考えられる。瓦器を含む土器が出土したが、細片であり、詳細は不明である。

**SD14 (図 18)** 調査区南側を東西方向に走り、東端で南に向かって屈曲する溝である。幅約0.4~0.6 m、検出長は東西14 m、南北4 mを測る。断面形は浅い「U」字形を呈し、深さ約0.3 mを残す。

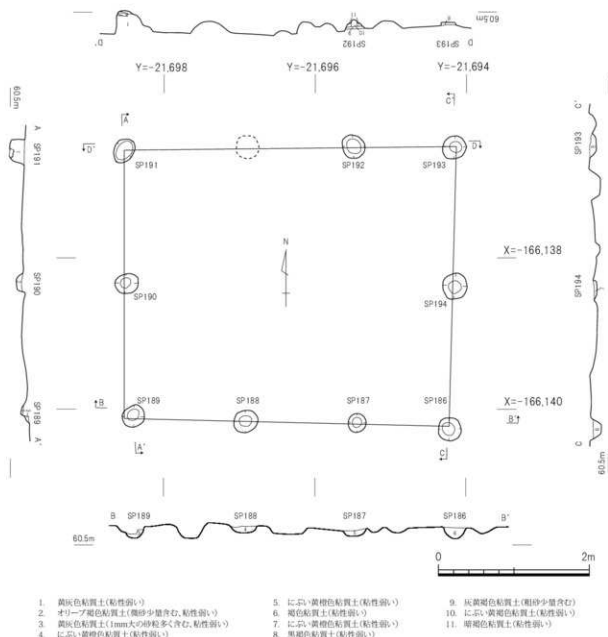


図 15 SB10 平面・断面図 (S = 1/80)

西端で旧河道の東岸に取り付き、西端の底面は東端より約 0.2 m 低いことから、旧河道への排水機能を担った可能性が考えられる。SD15 と重複関係にあり、SD15 より新しい遺構である。12 世紀後半の瓦器塊が出土している。

**SD15 (図 18)** 調査区南側を東西方向に走る溝である。幅約 0.6 m、深さ最大 0.2 m を測り、断面形は浅い「U」字形を呈する。重複関係から、SD14 よりも古い遺構である。「て」字状口縁の土師器皿が出土している。

**SE16 (図 19)** 調査区中央西寄りに位置する井戸である。平面形は正方形で、南北 1.2~1.5 m、東西 1.4~1.6 m を測る。深さ 1.35 m を残す。遺構写真と遺構断面図の形に齟齬があるが、断面図作成時点では掘り残しがあったと思われる。断面形は、上半は方形、下半は「U」字形を呈する。遺構中央を円形に掘り下げ、最下層は木質を含むことから、井戸枠として曲物を利用したと考えられる。遺



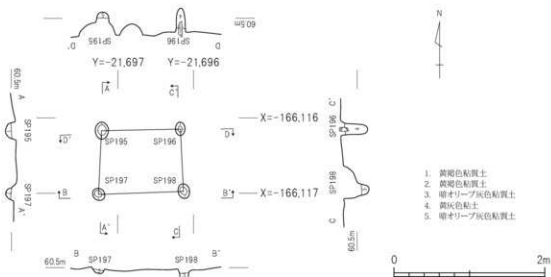


図 16 SB 11 平面・断面図 (S = 1/50)

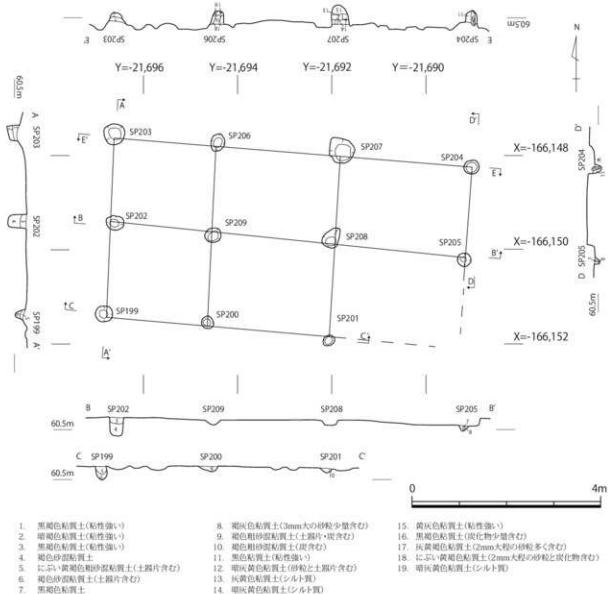


図 17 SB 12 平面・断面図 (S = 1/80)

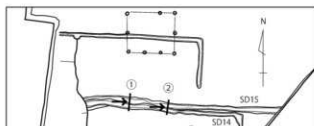


図18 SD14・15 断面図 (S = 1/40)

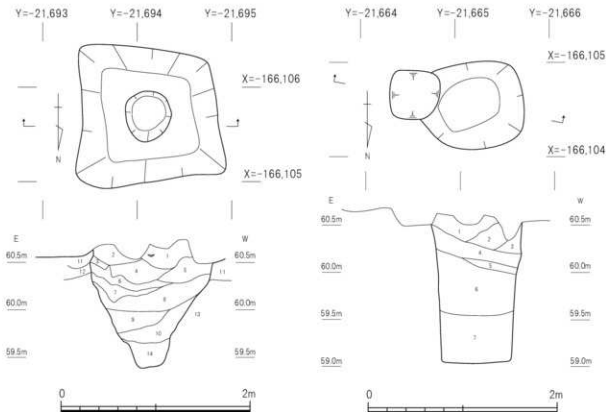


図19 SE16 平面・断面図 (S = 1/40)

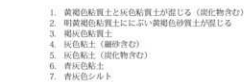


図20 SE17 平面・断面図 (S = 1/40)

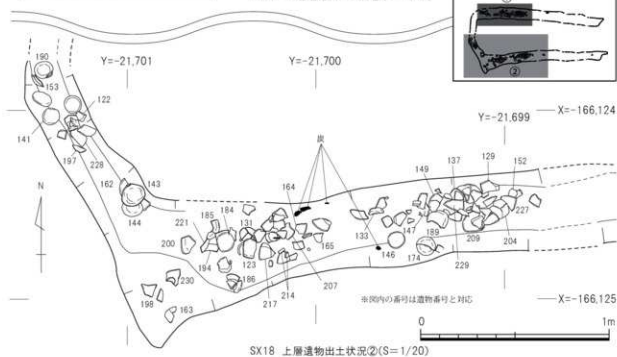
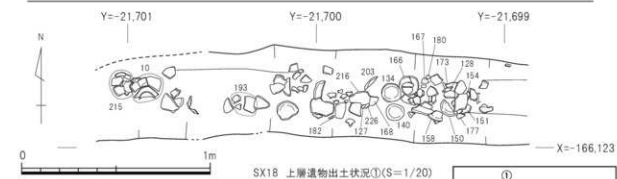
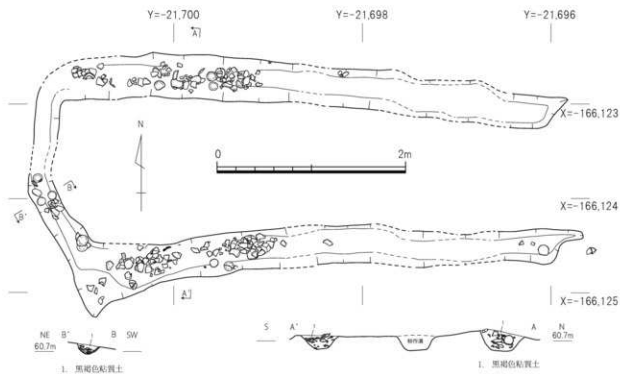


図21 SX18 平面図 (S=1/40)・遺物出土状況図 (S=1/20)

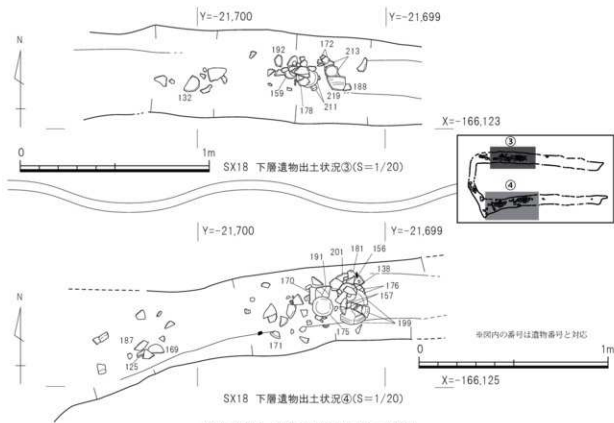


図22 SX18 遺物出土状況図 (S = 1/20)

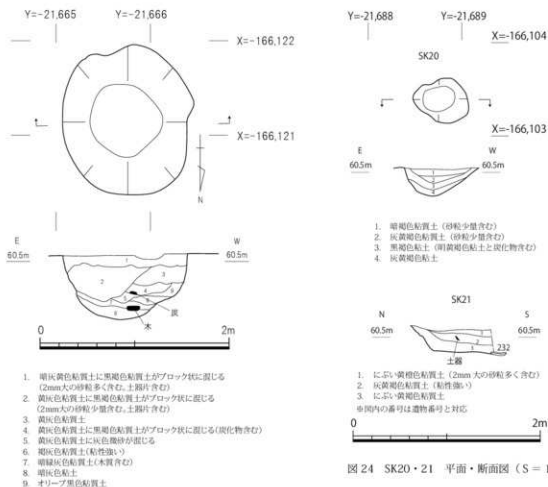


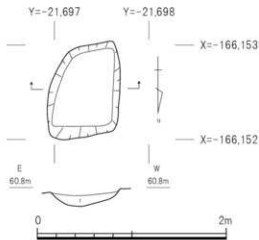
図23 SK19 平面・断面図 (S = 1/40)

図24 SK20・21 平面・断面図 (S = 1/40)

構埋土にはブロック土を含む層があり、人為的に埋め戻されている。遺物は出土しなかった。

**SE17 (図 20)** 調査区中央やや北寄りに位置する井戸である。平面形は不整形円形で、短径約 0.9 m、長径約 1.1 m を測る。断面形は「コ」字形を呈し、深さ約 1.6 m を残す。土層断面の写真撮影の時点では、掘り残しがある。重複関係から SB02 よりも古い遺構である。出土した土器は細片が多いが、11 世紀後半～12 世紀前半の瓦器境が含まれている。

**SX18 (図 21・22)** 調査区中央西端に位置する平面形が「コ」字状の溝である。全長約 12.5 m、長辺約 5.7 m、短辺約 2.5 m、幅 0.25～0.4 m を測る。断面形は浅い「U」字形で、深さ 0.1～0.2 m を残す。多量の土師器、瓦器と少量の羽釜、鉄製品が出土した。一部、耕作溝に削平されているが、遺物は主に遺構の西半に集中しており、「て」字状口縁の土師器皿が多い。埋土にはブロック状の炭化物が含まれる。出土土器が多いことから、調査時には 2 回に分けて、出土状況の記録を作成している。便宜上、上層・下層と呼称するが、記録の作成は任意の面に分けて行っている。遺構埋土は単層であり、出土遺物の中には側面を下にして立った状態で検出されたものや、折り重なった状態で出土した



1. 灰褐色砂質粘土(土器片、炭含む)

図 25 SX25 平面・断面図 (S = 1/40)

ものもあり、一括性が高い。出土遺物から 12 世紀前葉の遺構である。

**SK19 (図 23)** 調査区中央やや東寄りに位置する土坑である。平面形はやや不正な楕円形で、長径約 1.6 m、短径約 1.3 m、深さ約 0.7 m を測る。断面形は楕形である。埋土にブロック土を多く含み、人為的に埋め戻された可能性がある。瓦器皿などが出土しているが、細片のため、時期は不明である。

**SK20 (図 24)** 調査区中央やや北西寄りに位置する土坑である。平面形は不整形円形で直径約 0.8 m、深さ約 0.3 m を測る。ただし、平面図は空中写真測量で作成した

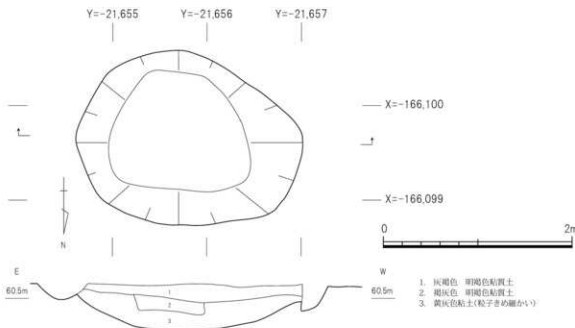


図 26 SX22 平面・断面図 (S = 1/40)

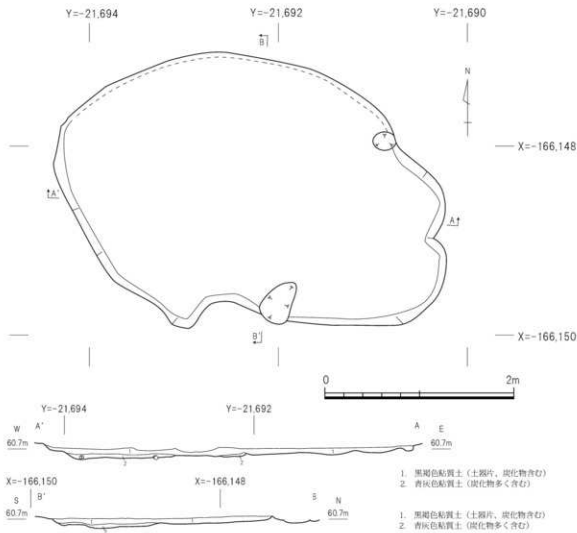


図 27 SX23 平面・断面図 (S = 1/40)

図面をもとにしたため、断面図と平面図に規模の齟齬がある。遺物は出土していない。

**SK21 (図 24)** 調査区中央東寄りに位置する土坑である。遺構の南東半は側溝に削平されており、調査時に平面図を作成していないため、断面図のみの報告である。全容は不明であるが、平面形は隅丸方形もしくは不整形円形、断面形は逆台形を呈すると想定される。底面から 11 世紀後半の完形の土師器皿が出土している。

**SX25 (図 25)** 調査区南に位置する土坑である。平面形はやや不整形な方形で、長辺約 1.0 m、短辺約 0.7 m を測る。断面形は薄い皿形である。遺物は出土していない。

**SX22 (図 26)** 調査区北東に位置する土坑である。平面形はやや不正な楕円形で、長径約 2.4 m、短径約 1.8 m、深さ約 0.5 m を測る。粘土層が厚く堆積している。土師器、黒色土器、瓦器、輸入白磁が出土しており、遺構の時期は 12 世紀前半頃である。

**SX23 (図 27)** 調査区南に位置する浅い落ち込みである。平面形はやや不整形な楕円形で、長径約 4.2 m、短径約 2.9 m を測る。深さは約 0.1 m を残す。埋土に炭化物を多く含む。SB10 と重複関係にあり、SX23 の埋没後、SB10 が建てられている。土師器、瓦器など比較的多量の土器が出土しており、12 世紀中頃～後半の遺構と考えられる。

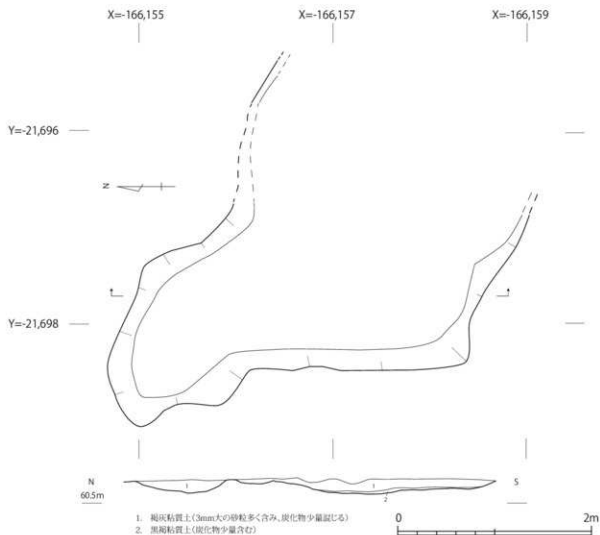


図28 SX24 平面・断面図 (S = 1/40)

**SX24 (図28)** 調査区南に位置する浅い落ち込みである。遺構の規模は南北約4.4m、東西約3.9mを測る。12世紀後半頃の瓦器塚が出土している。

**旧河道 (図29)** 調査区西辺を南北方向に流れる流路で、調査区の南半及び北端で東岸のみを確認している。調査区保持及び安全のため、部分的な掘削に留めている。西岸は調査区外のため、川幅等の全容は不明であるが、検出した最大幅は約7.2m、深さ約1.7mを測る。東岸の断面形は場所によって異なり、「V」字形や箱形が想定できる。12世紀中頃の瓦器塚が出土している。

**坪界溝 (図30)** 調査区北端を東西に走る複数条の溝である。調査地は、『大和国条里復原図』によると葛下郡二十六条一里十六坪(平ヶ坪)と十七坪(馬場)の坪界に位置している。断面図を提示するが、厳密に坪界溝と通常の耕作溝を識別することはできなかった。ただし、調査区北辺では多くの東西溝が密集しており、この中の数条、もしくはすべてが坪界としての役割を果たしていたと考えられる。坪界を示すために素掘りの溝を何度も掘りなおしていたと考えられ、坪界溝周辺で掘り直しに伴う整地土を確認している。なお、複数条を1対として利用していた可能性がある。

**整地土 (図30)** 調査区北辺西半に広がる整地層である。検出範囲は東西約34.0m、南北約6.5～7.0m、深さは約0.15mを測る。この整地土の下層でも多くの東西方向に走る耕作溝を検出しており、坪界溝を維持するための整地土であったと考えられる。

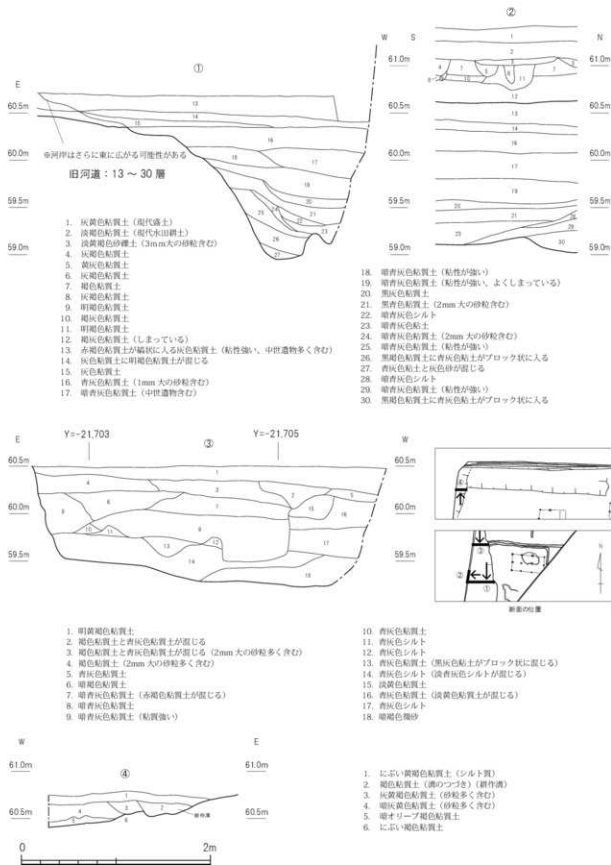


図29 旧河道 断面図（S = 1/40）



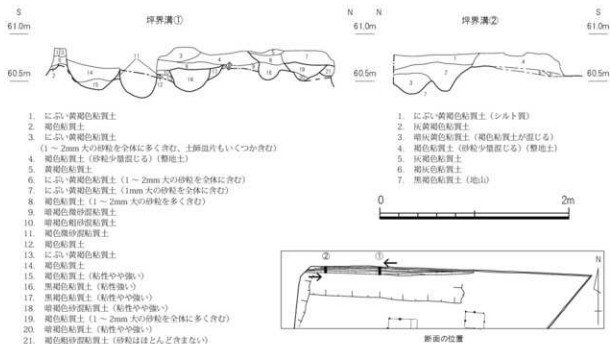


図30 坪界溝 断面図 (S = 1/40)

SP52 調査区南端に位置するピットである。平面形は不整形形を呈する。直径約 0.4 m を測る。旧河道埋没後に掘られた遺構である。ピット上面から飾り金具 (271) が出土した。

その他ピット 調査区全域に直径約 0.2~0.8 m のピットが分布している。特に、調査区南部の SB12 周辺と調査区中央やや東寄りの SB08 付近に集中する。SA34 のように、整理作業段階で構造物に復元できたものもあり、今回記載した建物・柵以外にも建物などが存在する可能性がある。

#### 下層遺構

下層遺構は遺物の出土量が少なく、時期を特定できないものもあるが、概ね弥生時代後期及び古墳時代中期を中心とする溝や土坑からなる。

SD27 (図 32) 調査区中央に位置する溝である。南東—北西方向の溝で、調査区東側で南に大きく屈曲する。検出長約 34 m、幅約 0.4~0.7 m を測る。断面形は緩やかな「V」字形もしくは「U」字形を呈し、深さ約 0.3~0.5 m を測る。土師器高環、小型丸底壺、甕、弥生土器壺などが出土した。古墳時代中期前半の遺構である。

SD28 (図 33) 調査区西辺に位置する南北方向の溝である。検出長約 30.0 m、幅約 2.1 m を測る。断面形は逆台形を呈し、深さ約 1.2 m を残す。出土遺物には、弥生土器高環、甕などがあるが、出土量は少ない。遺構の重複関係から SD27 より新しく、古墳時代中期前半以降の遺構である。

SD29 (図 34) 調査区北西隅に位置する南西—北東方向の溝である。検出長約 9.5 m、幅約 3.2 m を測る。断面形は逆台形を呈し、深さ約 1.2 m を残す。重複関係から、SD28 より新しい遺構である。

SD30 (図 35) 調査区中央を緩やかに蛇行しながら南北に流れる溝である。検出長約 51.0 m、幅 1.0~3.0 m を測る。調査区南側で断面形は緩やかな「V」字形を呈し、深さ約 0.4~1.1 m を残す。奈良県立橿原考古学研究所が調査区北側隣接地で行った 11 次調査の溝 166 と同一の溝である。北・南側ともに調査区外に続いている。調査区中央付近に深い落ち込みがあり、弥生時代後期の器台や古墳時代の土師器高環が出土している。この落ち込みの遺物には弥生時代中期~後期の遺物が多く、こ

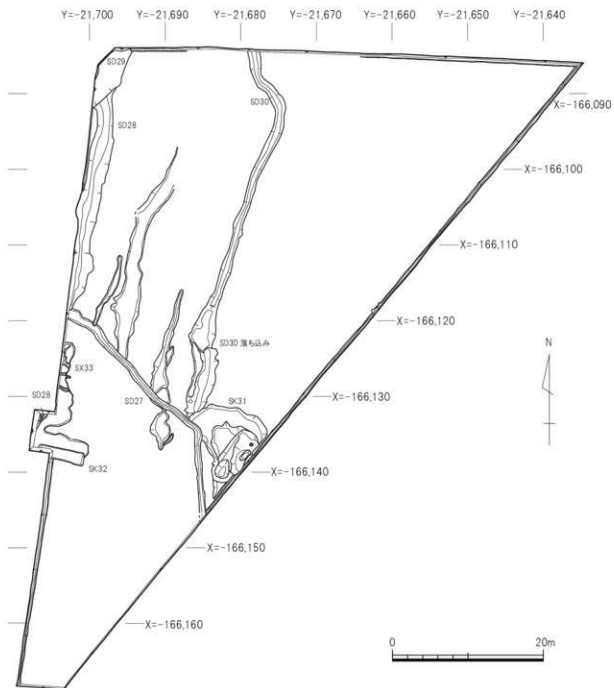
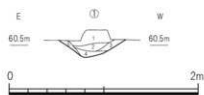


図31 下層遺構配置図 (S = 1/500)



1. 黒褐色粘質土 (粘性強)
2. 黒褐色粘質土 (1mm 大の砂粒多く含む)
3. 黄灰色粘質土 (粘性強)
4. 黄灰色粘質土 (2mm 大の砂粒少量含む)
5. 黄灰色粘質土 (粘性強、黒砂少量含む)



1. 黒褐色粘質土 (2mm 大の砂粒少量含む)
2. 黒灰色シルト
3. 灰白色砂 (3mm 大の砂粒含む)
4. 黒褐色粘質土 (2mm 大の砂粒少量含む)
5. 黒褐色粘土 (土層片含む)
6. 黄褐色粘質土 (2mm 大の砂粒大量に含む)
7. 黒褐色粘質土 (2mm 大の砂粒多く含む)

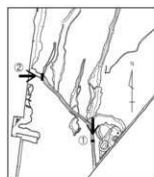
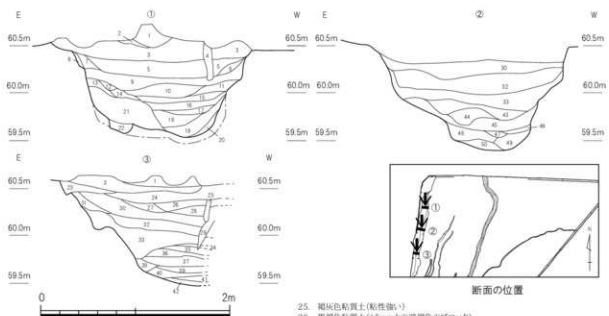


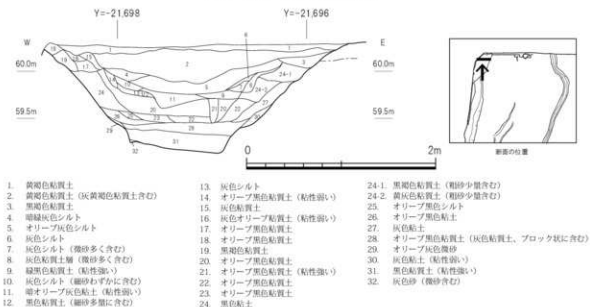
図32 SD27 断面図 (S = 1/40)



1. 褐色粘質土(1mm大の砂粒多く含む)
2. 暗褐色粘質土
3. 黒褐色粘質土
4. 田うらぎ多量
5. 褐色粗砂質粘質土(1mm大の砂粒少量含む)
6. 暗褐色粘質土
7. 黒褐色粘質土
8. 黒褐色粘質土(黄褐色の粘質土ブロック含む)
9. 褐色微砂質粘質土(炭を含む)
10. 黒褐色粘土(粘性やや強い、微砂のブロック含む)
11. 黄灰色粘土(微砂混じる)
12. 黒褐色粘土(微砂混じる)
13. 黒褐色粘土(微砂混じる、炭含む)
14. 褐色粘土(粘土が細かい、炭含む)
15. 黒褐色粘土(粘性強い、微砂全体に混じる)
16. 黄灰色粘土(青灰色のややきめの細かい粘土、10mm大が全体に混じる)
17. 黒褐色粘土(細砂の混含)
18. 黒褐色粘土(細砂の混含に青灰色のきめの細かい粘土、10mm大が混じる)
19. 黄灰色粘土(細砂の混含)
20. 黒褐色粘土
21. オリーブ黒色粘土(青灰色のきめの細かい粘土、10mm大が全体に混じる、細砂も全体に混じる)
22. 黒色粘土
23. 黒褐色粘質土(1mm大の砂粒全体に含む)
24. 暗褐色粘質土(1mm大の砂粒全体に含む)

25. 褐色粘質土(粘性強い)
26. 黒褐色粘質土(1.5mm大の暗褐色のブロック)
27. 黒褐色粘質土(炭含む)
28. 褐色粗砂質粘質土
29. 黒褐色粗砂混じる粘土
30. 黒褐色粘質土(1mm大の砂粒を全体に含む、褐色15~20mm大のブロック全体に含む)
31. にぶい、黄褐色粘質土
32. 黒褐色粘質土(粘性やや強い、にぶい黄褐色15~20mm大のブロック全体に含む)
33. 灰色微砂質粘質土(粘性強い、にぶい、黄褐色、青灰色の20~30mm大のブロックを全体に含む、炭も含む)
34. 灰色微砂粘土
35. 褐色砂質粘土(2mm大)
36. オリーブ黒色粘土(粘性強い)
37. 褐色細砂
38. 灰色粘土
39. 灰色細砂
40. 灰色粘土(青灰色5mm大の粘土ブロック含む)
41. 灰色微砂
42. 青灰色微砂(1mm大)
43. オリーブ黒色微砂粘質土
44. 褐色細砂(5mm大)
45. オリーブ黒色粗砂質粘土
46. 灰色細砂
47. 褐色細砂粘土
48. 青灰色粘土
49. 青灰色微砂粘土
50. 青灰色微砂粘土

図33 SD28 断面図 (S = 1/40)

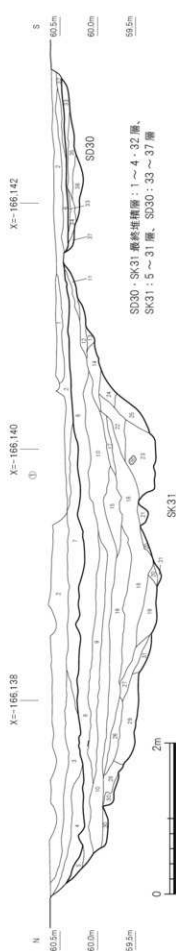


1. 黄褐色粘質土
2. 黄褐色粘質土(炭黄褐色粘質土含む)
3. 黒褐色粘質土
4. 暗緑灰色シルト
5. オリーブ灰色シルト
6. 灰色シルト(微砂多く含む)
7. 灰色粘土層(微砂多く含む)
8. 緑灰色粘質土(粘性強い)
9. 灰色シルト(細砂わずかに含む)
10. 灰色粘土(細砂わずかに含む)
11. 暗オリーブ灰色粘土(粘性強い)
12. 黒色粘質土(細砂多量に含む)

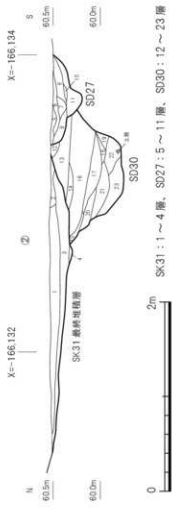
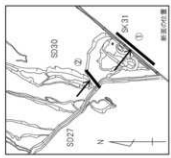
13. 灰色シルト
14. オリーブ黒色粘質土(粘性弱い)
15. 灰色粘質土
16. 灰色オリーブ粘質土(粘性弱い)
17. オリーブ黒色粘質土
18. オリーブ黒色粘質土
19. 黒褐色粘質土
20. オリーブ黒色粘質土
21. オリーブ黒色粘質土(粘性弱い)
22. オリーブ黒色粘質土
23. オリーブ黒色粘質土
24. 黒色粘土

- 24-1. 黒褐色粘質土(細砂少量含む)
- 24-2. 黄灰色粘質土(細砂少量含む)
25. オリーブ黒色シルト
26. オリーブ黒色粘土
27. 灰色粘土
28. オリーブ黒色粘質土(灰色粘質土、ブロック状に含む)
29. オリーブ灰色微砂
30. 灰色粘土(粘性弱い)
31. 灰色粘質土(粘性強い)
32. 灰色砂(微砂含む)

図34 SD29 断面図 (S = 1/40)



- SD30・SK31 最終堆積層：1～4・32層、SK31：5～31層、SD30：33～37層
1. 暗褐色粘質土 (粘性強)
  2. 暗褐色粘質土 (粘性強)
  3. 暗褐色粘質土 (粘性強)
  4. 黒色粘質土 (2mm 水の卵粒多く含む)
  5. 黒色粘質土 (2mm 水の卵粒多く含む)
  6. 黒色粘質土 (2mm 水の卵粒多く含む、粘性強い)
  7. 黒色粘質土 (粘性強)
  8. 黒色粘質土 (粘性強)
  9. 黒色粘質土 (2mm 水の卵粒多く含む)
  10. 黒色粘質土 (2mm 水の卵粒多く含む、上層片状)
  11. 暗オリーブ褐色粘質土 (粘性強)
  12. 暗褐色粘質土 (粘性強)
  13. 黒色粘質土 (粘性強)
  14. 暗褐色粘質土 (2mm 水の卵粒多く含む)
  15. 暗褐色粘質土 (粘性強)
  16. 暗オリーブ黒色粘質土 (粘性強)
  17. 暗オリーブ黒色粘質土 (粘性強)
  18. 暗オリーブ黒色粘質土
  19. 黒色粘質土 (2mm 水の卵粒多く含む)
  20. 暗オリーブ黒色粘質土 (2mm 水の卵粒多く含む)
  21. 暗褐色粘質土
  22. 黒色粘質土 (2mm 水の卵粒多く含む)
  23. 黒色粘質土 (2mm 水の卵粒多く含む)
  24. 暗オリーブ黒色粘質土 (2mm 水の卵粒多く含む)
  25. 黒色粘質土 (2mm 水の卵粒多く含む)
  26. 暗褐色粘質土 (粘性強)
  27. 黒色粘質土 (2mm 水の卵粒多く含む)
  28. 暗オリーブ褐色粘質土 (2mm 水の卵粒多く含む)
  29. 暗オリーブ褐色粘質土 (2mm 水の卵粒多く含む)
  30. 暗オリーブ褐色粘質土
  31. 暗オリーブ褐色粘質土
  32. 暗褐色粘質土 (粘性強)
  33. 暗褐色粘質土 (粘性強)
  34. 暗褐色粘質土 (粘性強)
  35. 暗褐色粘質土 (粘性強)
  36. 暗褐色粘質土 (粘性強)
  37. 暗褐色粘質土



- SD30 : 1～4層、SD27 : 5～11層、SD30 : 12～23層
1. 暗褐色粘質土 (粘性強)
  2. 暗褐色粘質土 (粘性強)
  3. 暗褐色粘質土 (粘性強)
  4. 暗褐色粘質土 (粘性強)
  5. 暗褐色粘質土 (粘性強)
  6. 暗褐色粘質土 (粘性強)
  7. 暗褐色粘質土 (粘性強)
  8. 暗褐色粘質土 (粘性強)
  9. 暗褐色粘質土 (粘性強)
  10. 暗褐色粘質土 (粘性強)
  11. 暗褐色粘質土 (粘性強)
  12. 暗褐色粘質土 (粘性強)
  13. 暗褐色粘質土 (粘性強)
  14. 暗褐色粘質土 (粘性強)
  15. 暗褐色粘質土 (粘性強)
  16. 暗褐色粘質土 (粘性強)
  17. 暗褐色粘質土 (粘性強)
  18. 暗褐色粘質土 (粘性強)
  19. 暗褐色粘質土 (粘性強)
  20. 暗褐色粘質土 (粘性強)
  21. 暗褐色粘質土 (粘性強)
  22. 暗褐色粘質土 (粘性強)
  23. 暗褐色粘質土 (粘性強)

図 35 SD30・SK31 南東壁土層断面図 (S = 1/50)、SD27・SD30・SK31 断面図 (1/40)

Y=-21,684

Y=-21,682

Y=-21,680

X=-166,136

X=-166,138

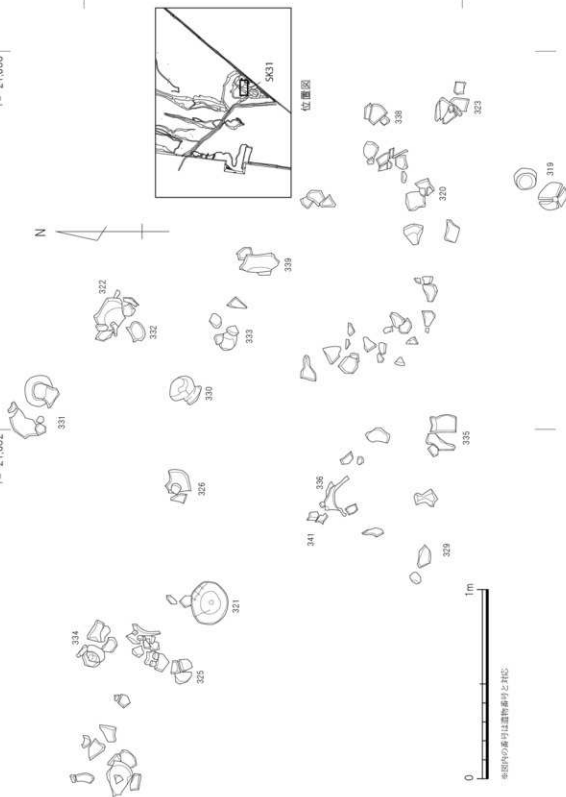


图 36 SK31 遺物出土状況図 (S = 1/20)



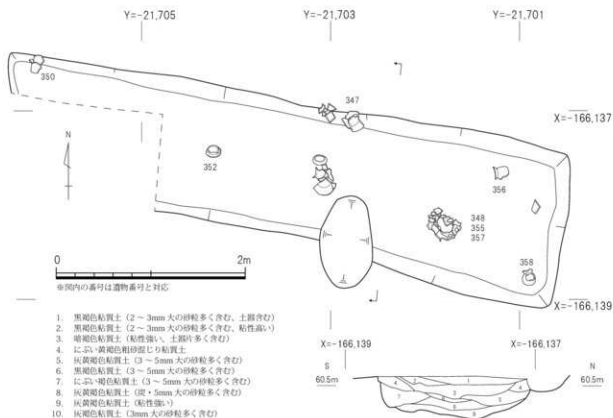


図 38 SK32 平面・断面図 (S = 1/40)

の落ち込みは弥生時代後期の遺構が削平されたものである可能性がある。後述する SK31 と重複関係にあるが、時期の前後は不明である。ただし、埋没時期については、最終堆積層を共有することから SK31 と同時期であると考えられる。遺構は古墳時代中期前半に埋没している。

**SK31 (図 35-36)** 調査区中央やや南東寄りに位置する土坑である。遺構は調査区外まで続いており、平面形は特定できないが、遺構の規模は東西約 10.0 m、南北 12.2 m 以上である。北辺に幅約 2.5～3.0 m のテラス状の段が形成され、その上面から土師器高坏、甕などの多くの遺物が出土した。ただし、破面が磨滅している土器が多く、大半が埋没時に SD30 の上流から流入した遺物であると考えられる。最終堆積層には古墳時代前期～中期前半の遺物が多く含まれている。調査時は前述の SD30 と一連の遺構として掘削しているが、年報 (濱岡 2003) 作成段階で、調査担当者が SD30 の後から掘削される別の遺構であると認識している。SD30 と最終堆積層を共有しており、古墳時代中期前半に埋没している。

**SK32 (図 38)** 調査区西辺中央に位置する土坑である。一部、調査区外に遺構が延びるが、平面形は長方形である。長辺約 6.0 m、短辺約 1.4 m を測る。深さは約 0.4 m を残す。出土遺物は土師器高坏、甕などで、上層から出土した。古墳時代中期前半の土師器高坏が出土している。

**SX33** 調査区西辺中央に位置する浅い落ち込みである。遺構は西側の調査区外に続いており、平面形などの全容は不明であるが、長辺約 15.0 m、短辺約 7.0 m を残す。調査時に弥生時代後期の甕などが出土している。

#### 【参考文献】

濱岡大輔 2003 『曲川遺跡 馬場地区の調査』『かしはらの歴史をさぐる』11 橿原市千塚資料館

## 第4節 遺物

出土した遺物には、土器（縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器）、施釉陶器、磁器、土製品、瓦、石製品（砥石、磨石）、石器、木製品、種子、人骨（歯を含む）、ガラス玉、金銅製品（金具）、鉄製品（釘）、鉄滓がある。

出土遺物の量は、遺物コンテナ約96箱分である。縄文時代以降の各時期の遺物が出土している。量的には、上層遺構に対応する平安時代中期～平安時代後期と下層遺構に対応する弥生時代後期～古墳時代中期の遺物が大半を占める。鎌倉時代より新しい時代の遺物はごくわずかである。

今回の報告では、概ね全体像のわかる遺物や出土遺構の時期、性格をよく表すと考えられる遺物を抽出している。

以下、遺構ごとに出土遺物について述べる。報告する遺構の順は、第Ⅲ章第3節に従う。

### 上層遺構

#### 耕作溝（図39～42）

土師器、瓦器、黒色土器などが出土している。

1～39は手づくね成形の土師器皿である。1はいわゆるコースター状の小皿である。口縁を内側に折りたたむ。2～8は「て」字状口縁を持つ小皿である。2～4、6・7は比較的胎土が粗く、器壁が厚い。2はいわゆる「て」字状口縁に分類できるが、大きく形が崩れ、口縁の断面形は「て」字状をなさない。3・4・6・7は、口縁端部を丸く収める。5は胎土が密で、器壁が薄く全体的に一定の厚さを保つ。後述するSX18出土の121～126の一群と類似する。8は口縁端部に面を持つ。9～19は口縁部外面を二段の横ナデで仕上げる小皿である。色調は淡橙色～淡褐色を呈する。9～17は口縁部の断面形はやや丸みを帯びた三角形で、上段の横ナデはやや面取り状を呈する。15は底部内面の中央付近を薄く削り取った上で、直径約4mm程の孔を焼成前に穿孔する。底部外面には粘土板の接合痕が明瞭に残る。20～25は口縁を横ナデで仕上げる小皿である。20は口縁端部に向かって器壁が薄くなる。21・25は場所によって口縁の形状が大きく異なるが、一部で口縁を面取り状に近い二段ナデが確認できる。22・23は底部と口縁部の境に、強い横ナデを施したことによる段がつく。26～39は口縁を二段ナデで仕上げる大皿である。口縁部がやや外側に開くもの（27・36・39）を除き、口縁部は直立する。色調は橙色に、ぶい黄橙色、淡黄色などバリエーションがある。28・35は上段のナデが口縁上方に施され、断面がやや丸く、面取りに近い形状を呈する。28・36は口縁及び底部内面に煤が付着しており、灯明皿として使用している。

40は土師器の台付皿の底部である。脚部外面には接合痕が明瞭に残る。

41～44は回転台成形の土師器小皿である。内外面に回転台による成形時の段が残る。41・43は底部を回転ヘラ切で、42は回転糸切で切り離す。44は磨滅が激しく不明瞭であるが、糸切による底部の切り離してであろう。45～47は土師器の坏である。45は底部外面を底部の外周に沿う形で幅5mm程円形に削り取っており、高台状を呈する。46は磨滅が激しく、底部の切り離し方法は不明である。47は底部外面に回転糸切痕が明瞭に残る。48～50は土師器の羽釜である。48は内面に使用時の焦げが付着する。49は鈔の大部分が剥離するが、剥離面にも煤が付着しており、鈔が破損した後も使用を続けている。50は鈔より下のみに焦げが付着し、器壁も黒褐色を呈する。51は土師器の



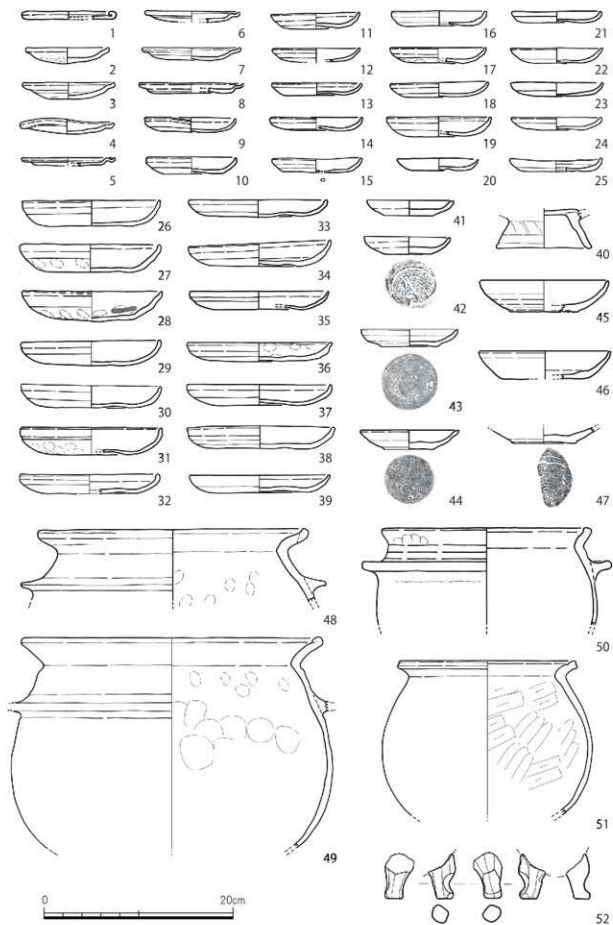


图 39 耕作溝出土遺物① (S=1/4)

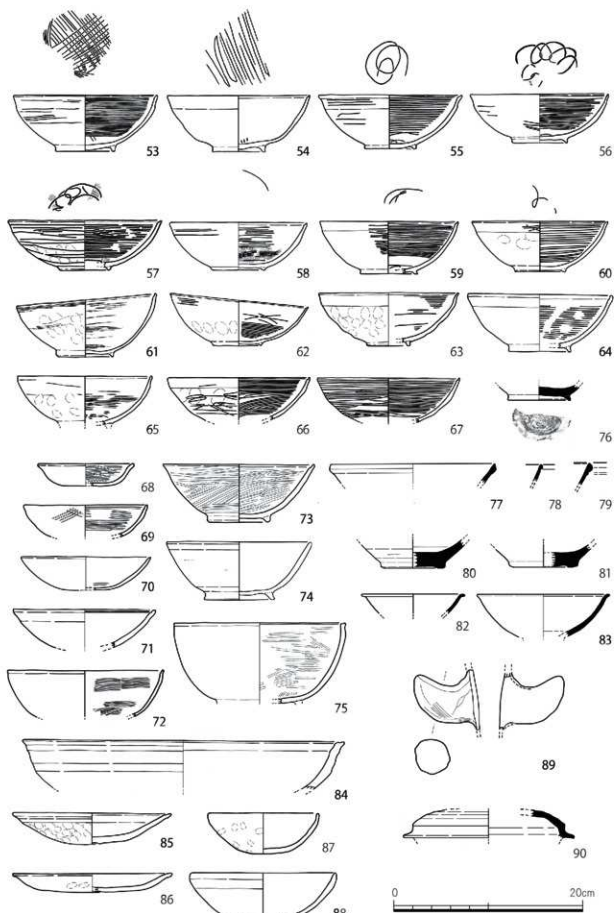


圖 40 耕作溝出土遺物② (S = 1/4)

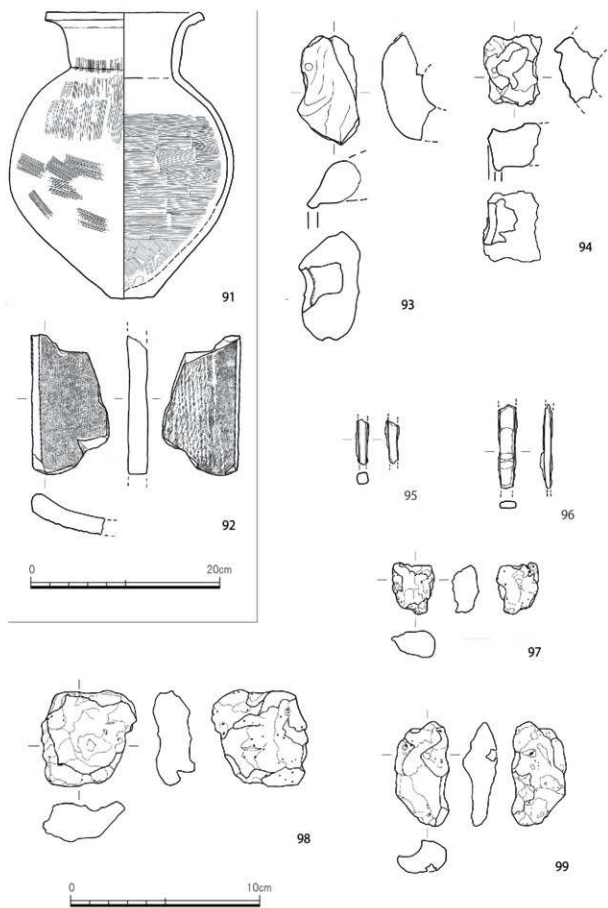


图 41 耕作溝出土遺物③ (S = 1/4 · 1/2)

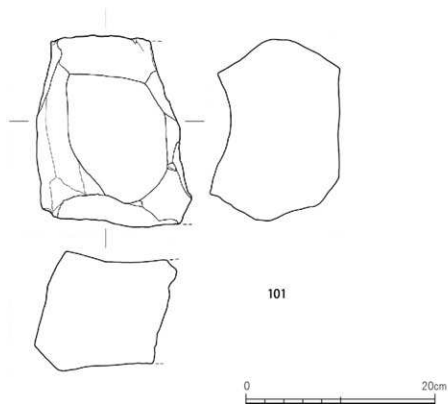
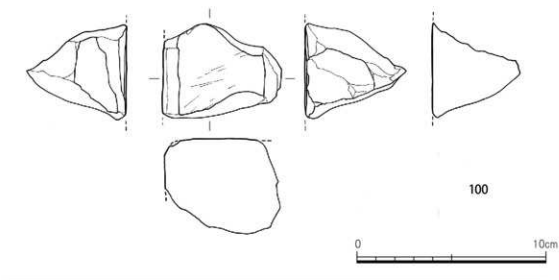


図42 耕作溝出土遺物④ (S = 1/4・1/2)

裏である。内外面に煤や焦げが付着している。

52は用途不明の土製品である。獣脚を模しており、盤などの脚部である可能性が考えられる。

53～67は瓦器塊である。大和型である。53は見込みに格子目状の暗文を施し、内面を隙間のないミガキで仕上げる。54は見込みに鋸歯状の暗文を施す。磨滅が激しく、色調は灰白色を呈する。55は見込みに渦巻きに近い連結輪状の暗文を施す。高台は断面形が台形を呈する。56は見込みに連結輪状の暗文を施す。口縁部付近の沈線を二重に巡らす。57は見込みをハケ状工具でナデ調整したあと、連結輪状の暗文を施す。58はミガキの前に施した工具によるナデの痕跡が明瞭に確認できる。見込みの暗文は渦巻きもしくは連結輪状文である。59はやや細いミガキで渦巻きもしくは連結輪状の暗文を見込みに施す。60は見込みに連結輪状文を施す。磨滅が激しく、外面のミガキは一部のみ

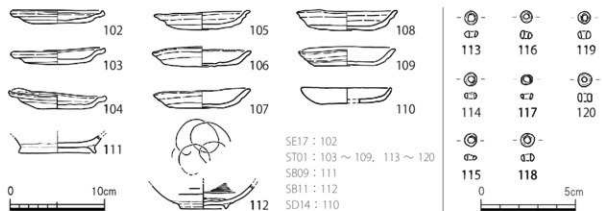


図43 ST01・SB09・SB11・SD14・SE17 出土遺物（S = 1/4・1/2）

確認できる。61・62は全体的に磨滅が激しい。62の器壁はやや薄い。63は体部外面に指オサエの痕跡が明瞭に残り、口縁は強い横ナデのため外反する。64は口縁の沈線がやや低い位置に巡る。65は磨滅が激しく、高台部分が接合面で剥落する。66は内面のミガキにやや隙間があり、ミガキの前に施したナデ調整の痕が確認できる。67は体部外面の底部まで密にミガキを施す。見込みの暗文は鋸歯状文である。

68~75は黒色土器である。68は小皿である。内外面に黒化処理を施すB類で、口縁はやや外反する。70は坏である。内面にのみ黒化処理を施すA類である。69・71・72は坏もしくは埴である。69はB類で、口縁部内面に沈線が巡る。底部付近にやや平坦な面があり、高台がつく可能性がある。71はA類である。口縁部内面に沈線が巡る。72はB類である。口縁部にわずかに炭化物が付着する。73・74は埴である。73はB類で、体部の内外面全体にミガキを密に施す。74は十分な黒化処理が施されておらず、色調は口縁部を除き内外面ともににぶい褐色を呈する。体部外面をケズリで仕上げる。75はA類の高台付鉢である。高台は接合面で剥落する。体部内面にはミガキを密に施し、外面はケズリで仕上げる。

76は緑釉陶器の碗である。高台の内側に段を有する。焼成はやや硬質で、色調は灰色を呈する。

77~81は輸入白磁の碗である。77・79~81は口縁に太い玉縁を有するタイプである。78は口縁がやや細い玉縁状を呈する。82は輸入白磁の小坏である。釉薬は青白色を呈し、胎土が白い。優品である。83は輸入白磁の坏もしくは碗である。口縁がやや外反する。

84・85・87・88は土師器の坏である。84は大型である。口縁端部に面を持ち、やや外反する。85は体部外面から底部にかけて指オサエの痕が明瞭に残る。87・88は内面を丁寧なナデで仕上げる。86は土師器の皿である。外面に指オサエの痕跡が残る。89は土師器の櫃の把手である。外面にハケ調整の痕跡が残る。

90は須恵器の蓋である。かえりを持つ。壺などの蓋であると考えられる。

91は弥生土器の広口壺である。体部内面及び体部外面の下半までをハケ調整で仕上げる。

92は平瓦である。磨滅のため不明瞭であるが、側面の形状から桶巻作りと見られる。凹面には布目の圧痕が、凸面に縦縄目のタキ痕が残る。

93・94は籬の羽口である。いずれも横断面形は円形である。94は外面に金属成分が付着し、多量の気泡が確認できる。

95・96は鉄製品である。95は釘の先端の可能性があり。96の断面形は長方形を呈する。用途

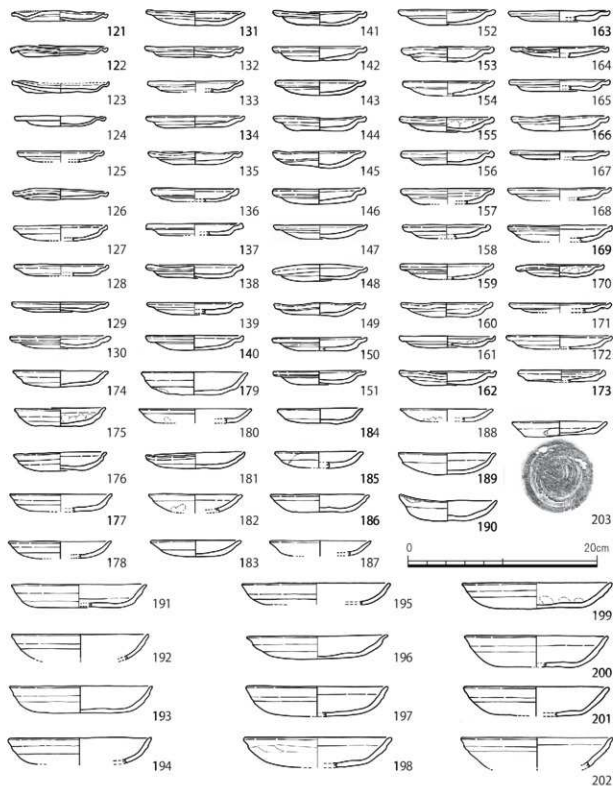


図44 SX18出土遺物① (S = 1/4)

は不明である。97～99は鉄滓である。97は砂粒が多く付着する面がある。重さは7.8gである。98は椀形滓の一部と考えられる。重さは58.6gである。99は一部に多量の気泡が確認できる。重さは26.2gである。

100は砥石である。破片のため、全容は不明であるが、確認できる使用面は一面である。

101は磨石である。一面のみを使用し、使用面は磨滅のため大きく凹む。

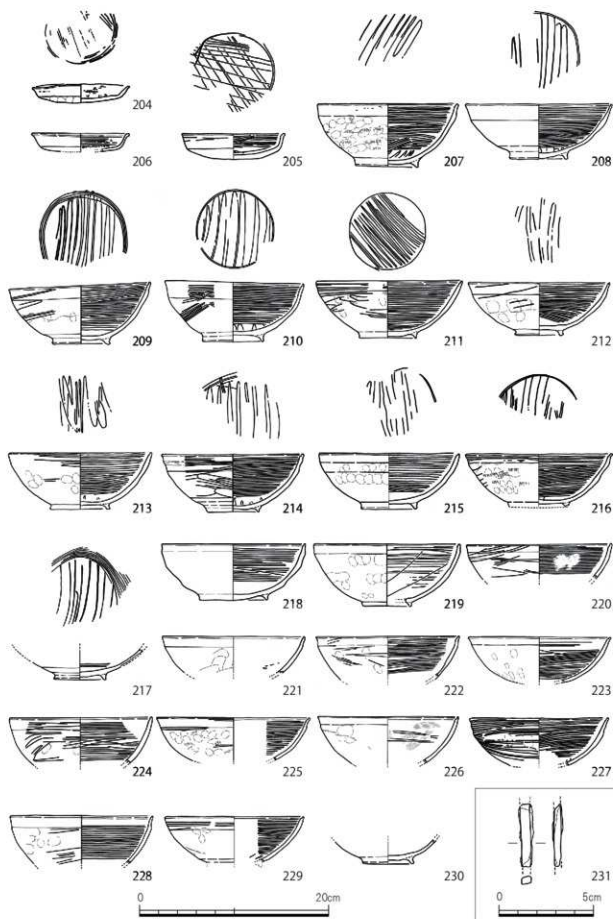


图 45 SX18 出土遗物② (S = 1/4 · 1/2)

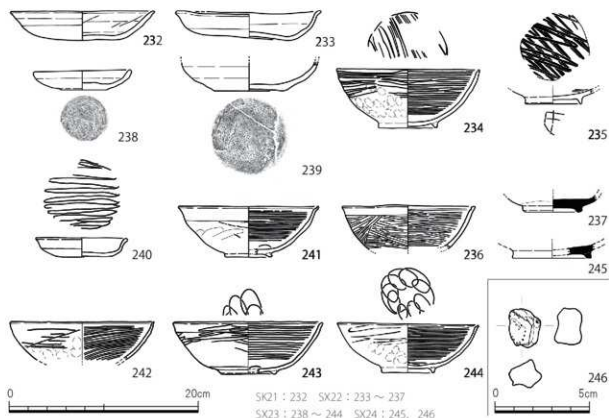


図46 SK21・SX22・23・24出土遺物 (S = 1/4・1/2)

#### ST01 (図43)

103～109は手づくね成形の土師器小皿である。口径9.4～10.3cm、高さ1.4～2.1cmを測る。103・104は「て」字状口縁を持つ。103は口縁端部には強いナデが施され、明確な面を持つ。104は口縁端部は丸く取め、底部外面に粘土板の接合痕を残す。105～109は口縁に二段の横ナデ調整を施し、強く外反する。胎土は、緻密な胎土(105)とやや粗い胎土(106～109)の2種類があり、後者は底部内外面に粘土板の接合痕を残す。

113～120はガラス玉である。直径0.6～0.7cm、厚さ0.3～0.4cmである。中央に直径0.3～0.4cm程の孔を持つ。劣化が激しく、すべて白色化している。一部、表面が層状に剝離するものや気泡が確認できるものがある。

#### SB09 (図43)

111は黒色土器碗の底部である。A類である。磨滅のため不明瞭であるが、見込みにミガキを施す。

#### SB11 (図43)

112は瓦器碗の底部である。大和型である。高台径4.7cmを測る。内面の圏線ミガキは密で、見込みには連結輪状の暗文を施す。高台の断面形状は三角形を呈する。

#### SD14 (図43)

110は手づくね成形の土師器小皿である。口径9.4cm、高さ1.6cmを測る。内外面を横ナデ・ナデ調整で仕上げる。

#### SE17 (図43)

102は、「て」字状口縁の土師器皿である。口縁端部に強いナデが施され、明確な面を持つ。



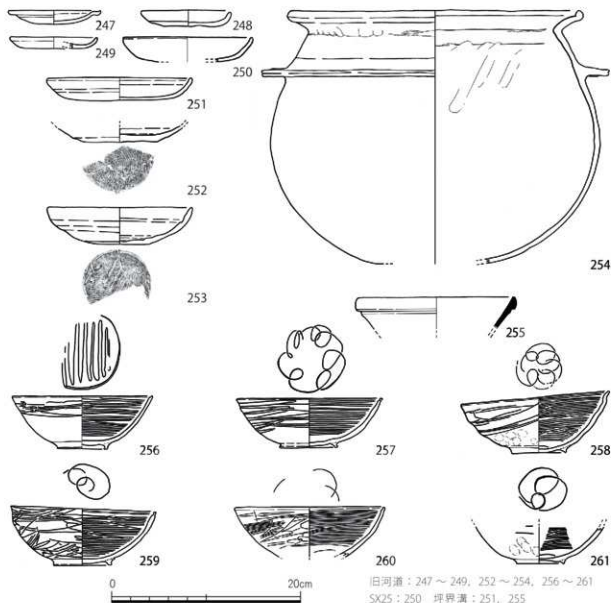


図 47 SX25・旧河道・坪界溝出土遺物 (S = 1/4)

SX18 (図 44・45)

121~202は手づくね成形の土師器皿である。121~173は「て」字状口縁を持つ土師器の小皿である。復元口径8.7~10.8cm、高さ0.9~1.8cmを測る。胎土が密で器壁の厚さが比較的薄く一定の厚さの一群(121~126)と胎土が粗く器壁の厚さが比較的厚い一群(130~173)に大別できる。121~126の色調は淡橙~橙色を呈する。口縁端部を強くなでて面を作る。器壁が2mm程と薄く、厚さもほぼ一定で他の「て」字状口縁を持つ皿と一線を画す。一部(121・123・126)に底部外面に粘土の接合痕が残る。128・129は、2~3mm程度と器壁が薄く一定であるが、胎土はやや粗い。口縁端部に面を持たない。130~174の色調は灰黄褐色やにぶい黄橙色、にぶい橙色などバリエーションがあり、胎土には金雲母・白色粒・長石を多く含む。口縁端部は一部(137・146)を除いて面を持たないものが大多数を占める。底部外面に粘土の接合痕を残すものがある(129・130・134・137・139・140・145・148・150・156・170)。174~179は土師器の小皿である。いずれも外面をナデ調整もしくは指オサエした後、口縁を二段に横ナデ調整する。色調は淡橙褐色で、胎土は粗く、金雲母を多く含む。復元口径9.5~11.1cm、高さ1.7~2.4cmを測る。口縁はわずかに外反する。

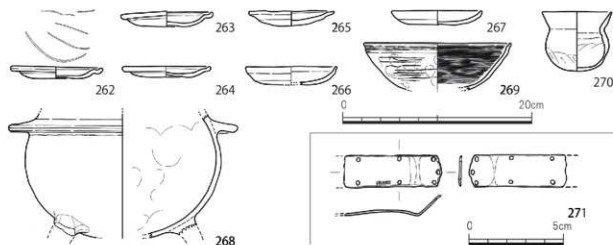


図 48 ビット出土遺物 (S = 1/4・1/2)

174・175の底部外面には粘土の接合痕が残る。なお、180・183についても、口縁部の調整はやや不明瞭だが、二段の横ナデ調整を施している可能性がある。181～190は口縁を1段横ナデ調整する土師器の小皿である。口径8.9～10.5cm、高さ1.4～2.9cmを測る。184・185は胎土や器形が似ており、いずれも口縁に向けて器壁がやや薄くなり、外反する。185・189の外面には底部から口縁にかけて明瞭に粘土の接合痕が残る。186は口縁部に強く横ナデ調整が施され、明確に段がつく。188は外面に明瞭な指頭圧痕が確認できる。191～202は口縁を二段に横ナデ調整する土師器の大皿である。口径14.0～15.5cm、高さ2.2～3.3cmを測る。色調は淡橙色～橙色で、いずれも金雲母を多く含む。

203は回転台成形の土師器小皿である。口径9.8cm、高さ1.4cmを測る。見込みから外面まで強い回転ナデが施され、稜がつく。体部側面に成形時に付着したと思われる粘土塊がつく。やや磨滅しているが、底部は回転ヘラ切りの痕跡が残り、回転方向は右方向である。

204～206は瓦器皿である。口径10.0～10.6cm、高さ1.9～2.6cmを測る。口縁はやや開き気味に立ち上がる。204は底部外面をナデ調整、指オサエで仕上げる。磨滅のため不明瞭であるが、見込みには鋸歯状もしくは格子目状の暗文を施す。205は口縁が小さな玉縁状を呈する。口縁部には油煙痕が残り、灯明皿として利用されたと考えられる。206は口縁端部が外反する。

207～230は大和型の瓦器碗である。復元口径14.4～16.0cm、高さ5.5～6.5cmを測る。外面のミガキの範囲は、体部上半のものと体部下半まで施すものがあるが、隙間が大きく省略気味のものが多い。内面の圏線ミガキは密に施されている。見込みの暗文が確認できるものは、いずれも鋸歯状である。高台の断面形は三角形(207・208・210・211・214・216)と台形(209・212・213・215・217・230)の2種類が存在する。207・216は口縁端部に面を持ち、外面に整形時の指頭圧痕と工具痕が明瞭に残る。

231は棒状の鉄製品である。幅0.5cm、残存長4.3cmである。

#### SK21 (図 46)

232は土師器坏である。内面には、制作時のものと思われる工具痕が残る。内面から体部外面にかけて油煙の痕跡が見られ、灯明皿として使用したと考えられる。

#### SX22 (図 46)

233は土師器大皿である。底部外面に指オサエの痕跡が明瞭に残る。体部内面には油煙痕が確認でき、灯明皿として使用したと考えられる。

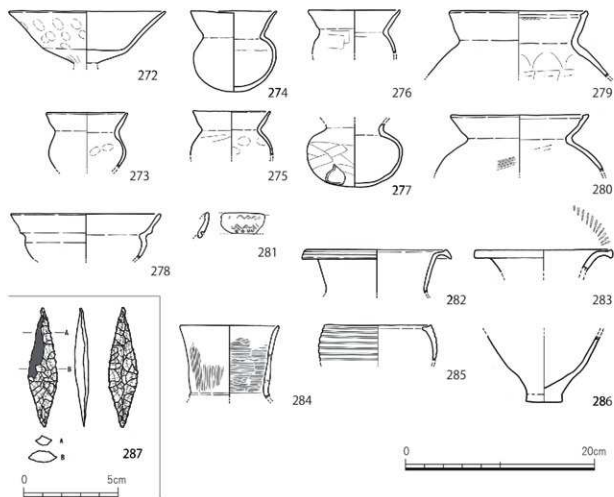


図49 SD27 出土遺物 (S = 1/4・1/2)

234は大和型の瓦器埵である。内面から体部外面中ほどにかけて密にミガキを施す。見込みの暗文が鋸歯状である。235は瓦器埵の底部である。見込みにはやや太い線で格子目状の暗文を施し、底部外面には焼成後に記号を施す。胎土はやや灰色がかっている。236は大和型の瓦器埵である。内外面ともに非常に密にミガキを施すが、体部外面の上端のみ横ナデが施される。

237は輸入白磁の碗の底部である。見込みは広く平坦で、沈線が巡る。

SX22からは上記の遺物に加えて種子(図版43)が出土している。

#### SX23 (図46)

238は回転台成形の土師器小皿である。底部が厚く、外面には回転糸切痕が残るが、磨滅のため回転方向は不明である。239は回転台成形の土師器杯である。底部外面には回転糸切痕が残る。

240は瓦器皿である。口縁が大きく外反し、見込みには鋸歯状の暗文を施す。241～244は大和型の瓦器埵である。241・243・244の見込みの暗文は連結輪状文である。241の体部外面には、斜め方向のナデ調整の痕跡が残る。

#### SX24 (図46)

245は緑軸陶器碗の底部である。高台は貼り付け高台で、接地面に段を有する。

246は鉄滓である。重さは6.3グラムである。

#### SX25 (図47)

250は手づくね成形の土師器大皿である。口縁外面を二段ナデ調整で仕上げる。

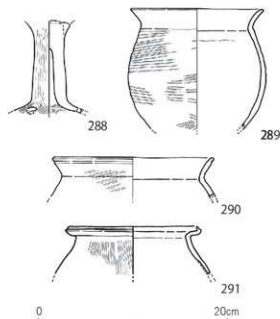


図50 SD28・29出土遺物 (S = 1/4)

#### 旧河道 (図47)

247～249は手づくね成形の土師器小皿である。247は「て」字状口縁を持つ。248は底部外面に粘土板の接合痕が残る。249の口縁端部には面取りが施される。

252・253は回転台成形の土師器杯である。ともに底部外面に明瞭な回転台切痕が残る。253の底部内面には油煙の痕跡が残る灯明皿である。

254は土師器羽釜である。内外面に広く煤や焦げが付着する。頸部に調整時の工具痕が残る。

256～261は大和型の瓦器碗である。256の見込みはやや平坦で、見込の暗文は鋸歯状文である。高台の断面形は逆台形を呈する。257～261の見込みの暗文は連結輪状文である。257・261の見込みには焼成前に土器を重ねた痕跡が残る。

#### 坪界溝 (図47)

251は手づくね成形の土師器大皿である。口縁を二段に横ナデで仕上げる。

255は輸入白磁の碗である。口縁を折り返して太い玉縁を作る。

#### ビット群 (図48)

262～271は上層遺構面のビットから出土した土器である。

262～267は手づくね成形の土師器小皿である。口径8.9～9.7cm、高さ1.1～1.9cmを測る。262～264は「て」字状口縁を持つ。262～264の胎土はやや粗く、淡橙色を呈する。器壁はやや厚い。265は口縁端部に向けて器壁が薄くなり、断面形は「て」字状ではないが、外面の調整などから「て」字状口縁を意識しているとみられる。266は口縁を二段に横ナデで仕上げる。

268は土師器羽釜である。磨滅が激しい。三方向に脚がつくタイプである。

269は大和型の瓦器碗である。磨滅と破損のため断定はできないが、見込みの暗文は鋸歯状文である。

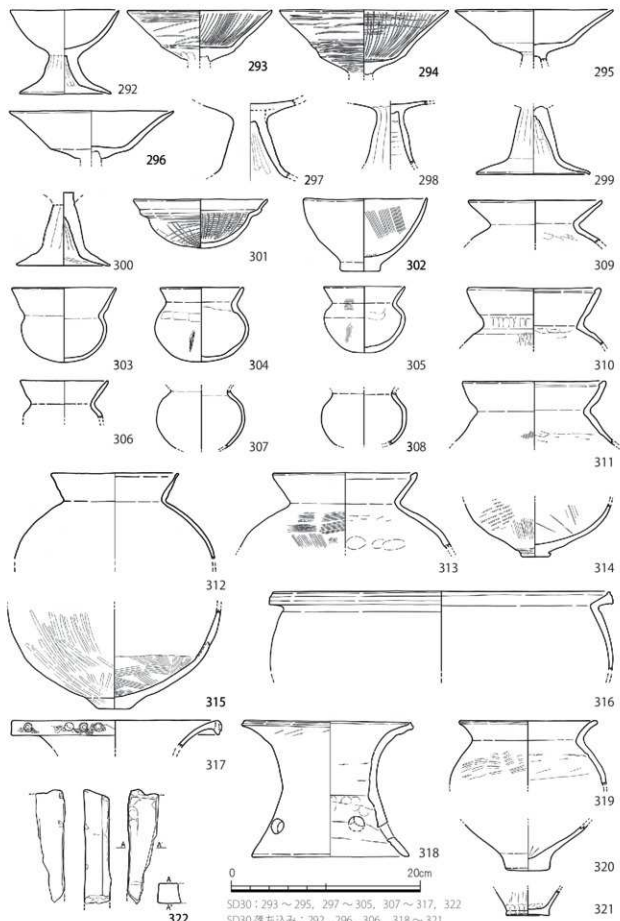
270は土師器の小型丸底壺である。口縁部径が胴部の最大径よりも大きい。

271はSP52から出土した飾り金具である。残存長5.0cm、幅1.6cm、厚さ0.1cmである。片面に縦方向の縞状の文様を彫り、塗金する。建具や調度品などの装飾に使われた可能性が高い。3辺には直径0.2cmの孔を設け、角には面取りを施す。先端から0.8cmのあたりで屈曲しており、意図的に曲げられた可能性が高い。

#### 下層遺構

##### SD27 (図49)

272は土師器高杯の杯部である。底部と口縁部に明確な稜を持ち、外面に指オサエの痕が残る。273～277は土師器の小型丸底壺である。273は口縁部がやや短く、胴部最大径よりも口縁部径が大きい。274・276は口縁部が長く、胴部最大径よりも口縁部径が大きい。274の体部内面上半には



SD30 : 293 ~ 295, 297 ~ 305, 307 ~ 317, 322  
 SD30 落ち込み : 292, 296, 306, 318 ~ 321

图 51 SD30・SD30 落ち込み出土遺物 (S = 1/4)

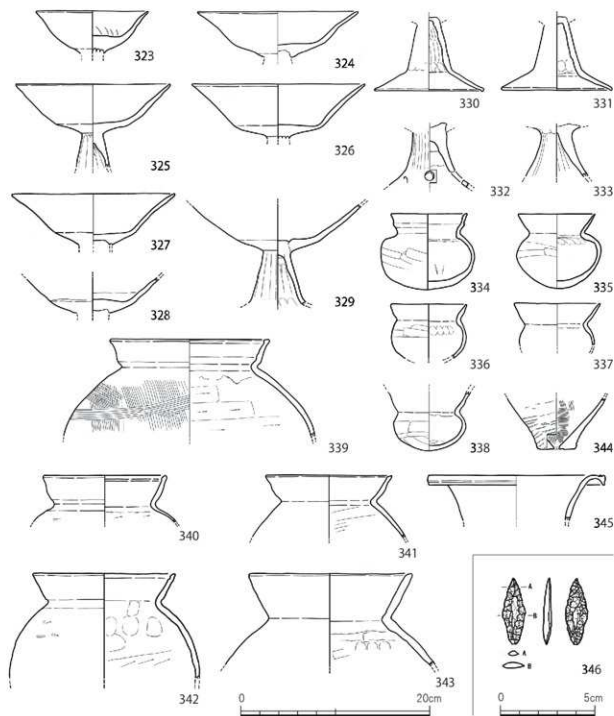


図52 SK31 出土遺物 (S = 1/4・1/2)

わずかに粘土の接合痕が残る。275は器壁が薄く、全体的に丁寧な作られている。277は体部下半に径3.0cmほどの孔が開いている。278は土師器の有段鉢である。口縁部内面に明確な段を持たず、口縁端部は緩やかに外反する。磨滅が激しく、調整は不明である。279・280は土師器の甕である。布留式である。279は体部内面にケズリを施す。280は、体部内面にケズリ、体部外面に細いハケ調整を施す。一部磨滅のため剥落しているが、外面は口縁端部まで全体的に煤が付着している。

281～285は弥生土器の壺の口縁である。281は壺の口縁部の拡張部が剥落したものである。外面に波状文と刺突文を施す。282は広口壺の頸部である。磨滅が激しい。283は広口壺である。口縁部上端を櫛描扇形文で飾る。284は長頸壺の頸部である。頸部内面に横方向のハケ調整、頸部外面

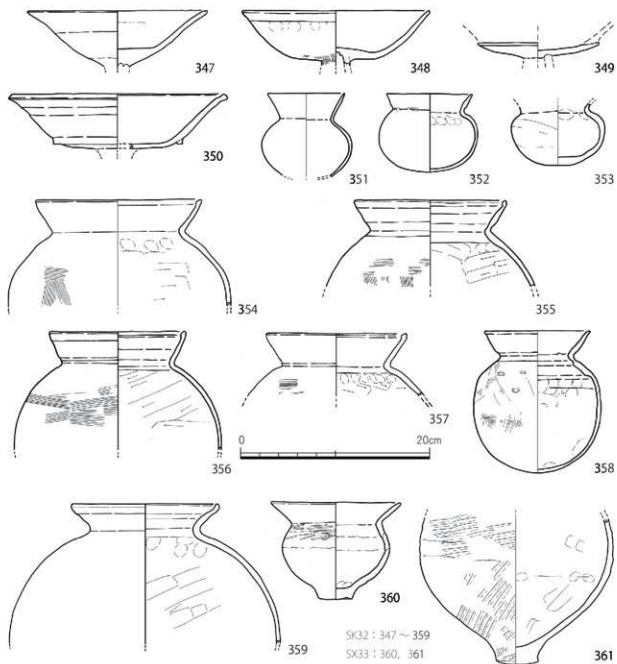


図53 SK32・SX33出土遺物 (S = 1/4)

に縦方向のハケ調整を施す。285は細頸壺の口縁部である。凹線文を施す。286は弥生土器の甕底部である。磨滅が激しく、内外面の調整は不明である。

287はサヌカイト製の石礫である。無茎の柳葉形である。重さは5.2gである。  
SD28・29 (図50)

288～291は、SD28・29に跨って出土しており、遺構毎に分けることができない。288は弥生土器高坏の脚部である。磨滅のためやや不明瞭であるが、外面に密にミガキを施す。内面にはハケの痕が残る。

289・290は土師器費である。289は外面を粗いタタキで仕上げる。焼成後の被熱により、体部の一部がやや赤い。290の口縁部外面には煤が付着する。291は弥生土器の瀬戸内系甕である。体部外面に粗いハケ調整を施す。

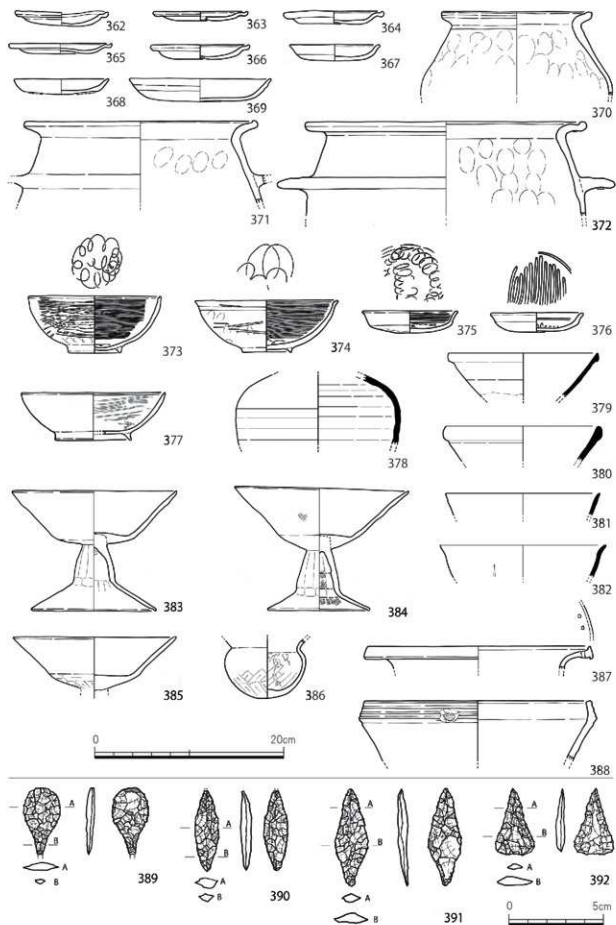


图 54 包含層・重機掘前時出土遺物① (S = 1/4 · 1/2)



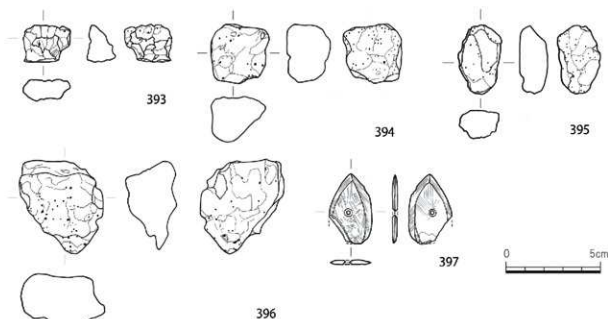


図 55 包含層・重機部前時等出土遺物② (S = 1/2)

#### SD30 (図 51)

293～300は土師器高坏である。293～295は坏部である。293は、坏部内面には横方向のハケ調整の後に放射状のミガキを、坏部外面上半には横方向のミガキを密に施す。294は内面に横方向のミガキを粗く施した後、放射状のミガキを施す。外面は坏部全体にミガキを施す。293・294は全体的に丁寧に作られている。295は内外面ともに非常に磨滅し、破面も丸みを帯びる。297～300は脚部である。297は坏部と脚部の接続部を上から粘土で覆って接合している。298の脚部外面のミガキは面取り状をなす。299は裾端部を下方に小さく折り曲げる。300は表面が磨滅しているが、脚部内面に放射状に工具の静止痕のような線が残る。301は土師器の有段鉢である。体部外面にケズリ調整したあと、ミガキを施す。内面は横方向のミガキの後、放射状のミガキを施す。全体的に丁寧に作りである。302は土師器の小型の鉢である。内面に斜め方向の細かいハケ調整の痕が残り、内面底部には工具を強く押し付けた痕がつく。303～305、307・308は土師器の小型丸底壺である。304は体部下半に長さ2.5cmの縦方向の孔がある。焼成後穿孔である。頸部から肩部にかけての内面には、粘土の織り目が明瞭に残る。305は部分的にやや粗いハケ調整の痕が残る。磨滅が進んでいるが、外面には全面にハケ調整が施されていたと考えられる。307・308は破面が丸みを帯びる。309～313は土師器甕の口縁部である。309は口縁部外面に煤が付着する。310～313は口縁内面が肥厚する甕である。布留式である。310・311は、外面にハケ調整を施し、内面は強いケズリで器壁を薄く仕上げる。312は全体的に器壁が薄く作られている。313は肩部がやや強く屈曲する。314・315は弥生土器の甕の底部である。314は外面にタタキを施した後、縦方向のミガキで仕上げる。315は内面にハケ調整、外面にミガキを施す。底部内面に工具の静止痕が放射状に残る。

316は弥生土器の甕もしくは鉢である。磨滅のため、やや不明瞭であるが、口縁に3条の凹線文を施す。317は弥生土器の広口壺である。口縁に施した波状文の上に、円形浮文を一定間隔で貼付ける。

#### SD30 落ち込み (図 51)

292は土師器高坏である。全体的に磨滅しており、調整は不明瞭であるが、脚部上半に面取り状のミガキを確認できる。296は土師器高坏の坏部である。内外面ともに非常に磨滅し、破面も丸み

を帯びることから、上流部から流されてきたものと思われる。306は小型丸底壺である。破面が丸みを帯びており、長期間流水にさらされていたものである。

318は弥生土器の器台である。下半には円形の透かし穴が5つ設けられており、内面には粘土紐を巻き上げた痕が残る。319～321は弥生土器の甕である。320は内面底部にハケ状工具の静止痕が放射状に残る。

322は砥石である。使用面は3面である。

#### SK31 (図 51)

323～333は土師器高環である。323はやや小型である。坏底部と口縁部で異なる種類の粘土を使用する。坏底部に使用される粘土は直径2～3mmの砂粒や金雲母を含み、口縁部の胎土よりも粗い。324は坏部と脚部の接合面で剥離している。325は坏部内外面をナデ調整で仕上げる。326～331は磨滅が激しく、破面も丸みを帯びておる。331は坏部と脚部の接合面で剥離している。332は脚部に円形の透かしが3カ所確認できる。透かしは一段で、配置から5つの透かしを施したと考えられる。外面には細かな縦方向のミガキを施す。333の脚部は段を持たず、裾部に向かって大きく広がる。外面には細かな縦方向のミガキを施す。334～338は土師器の小型丸底壺である。334は二重口縁である。口縁内部は平坦で、工具痕が残る。335は外面に黒斑が存在する。外面上半にケズリを施す。336は体部外面上半に横方向のケズリを施す。337は口縁部及び体部上半に黒斑が存在する。338は底部内面に逆「の」字の粘土紐の痕が確認でき、粘土紐を巻き上げて成形している。339～343は土師器甕である。339～342は甕である。布留式である。339は口縁部と体部の接合部付近を強くナデているため、内面がやや凹む。外面はハケ調整、内面はケズリで仕上げる。342は外面に煤が付着している。内面には圧痕とケズリの痕跡が明瞭に残る。343の体部内面には粘土紐の接合痕が残る。上端を除きケズリを施す。

344は弥生土器の有孔鉢である。底部中央を焼成前に穿孔する。体部内面はハケ調整、体部外面はタタキ調整を施す。345は弥生土器の広口壺である。磨滅のため不明瞭であるが、口縁端部に凹線文を施す。

346はサヌカイト製の石蹴である。無茎の柳葉形である。重さは1.5gである。

#### SK32 (図 53)

347～350は土師器高環の坏部である。347は体部内面に粘土の接合痕が確認できる。348は坏部と脚部の接合部付近に放射状のハケ調整を施す。坏部外面の上半は磨滅が激しい。349は坏底部のみ残存する。坏底部と口縁の接合部で剥離しており、分割成形時の痕跡が明確に分かる資料である。350は坏底部外面に断面台形の突帯を巡らす。内外面ともにナデ調整で仕上げる。351～353は土師器の小型丸底壺である。352は磨滅が激しいが、頸部にわずかに縦方向のハケ調整の痕跡が残る。353の体部には黒斑が存在する。354～359は土師器甕である。354～357は口縁内面が肥厚する甕である。布留式である。354・355・357はやや磨滅しており、外面の煤がわずかに残る。356は内面の頸部直下までケズリを施す。358は体部上半に直径6～8mmの楕円形の凹みが3カ所存在する。焼成前のものである。359は口縁端部をわずかに上方に引き出す。外面には黒斑が存在する。

#### SX33 (図 53)

360・361は弥生土器である。360は小型甕である。体部外面上半にタタキを施す。体部上半には粘土紐の接合痕が残る。361は甕である。使用時の被熱により外面の一部が橙色に変色し、煤が付

着する。

#### 包含層・重機掘削時等出土遺物（図 54・55）

362～369 は手づくね成形の土師器皿である。362～366 は「て」字状口縁を持つ小皿である。胎土はやや粗く、にぶい黄褐色を呈する。口縁端部に面を持つもの（365）と持たないもの（362・363・364・366）がある。367 は口縁端部が外反する。色調は橙色を呈する。368 は外面の器壁が剥落している。369 は口縁外面に二段の横ナデを施す。370 は土師器甕である。外面には体部から口縁部まで煤が付着する。371・372 は土師器羽釜である。口縁端部を上方にわずかに引き上げる。371 は鐙が大部分剥落している。372 は鐙より下に煤が付着する。

373・374 は瓦器塊である。大和型である。いずれも見込みに連結輪状文の暗文を施す。373 は体部外面に下半までミガキを施す。374 は口縁部が外反する。375・376 は瓦器皿である。375 は見込みに連結輪状の暗文を施す。底部外面には指オサエの痕が残る。376 は見込みに鋸歯状の暗文を施す。

377 は黒色土器の塊である。A 類である。内面に密にミガキを施す。

378 は灰釉陶器壺の体部である。

379～382 は輸入白磁の碗である。379・380 は口縁が太い玉縁状を呈する。381 は口縁部が直線的に開く。382 は輪花碗である。

383～385 は土師器の高坏である。383 は坏部と脚部の接合面で剥離する。384 は裾部内面に格子目状の工具痕が残る。385 は坏部外面下半に放射状のケズリを施す。386 は小型丸底壺である。頸部の破面が丸みを帯びる。

387 は弥生土器の広口壺である。口縁部に直径 4mm の孔を 2 カ所、上から下に向かって穿孔する。

388 は縄文土器の深鉢である。宮滝式である。口縁部の屈曲部に刺突文を施す。

389 はサヌカイト製の石錐である。錐部がわずかに欠損する。重さは 2.7g である。

390～392 はサヌカイト製の石鐙である。390 は柳葉形である。基部はやや丸みを帯びる。重さは 2.7g である。391 は柳葉形である。重さは 3.8g である。392 は無茎である。2.5g である。

393～396 は鉄滓である。393 は重さは 7.3 g である。394 は重さは 27.7 g である。395 は重さは 14.2 g である。396 は重さは 69.5 g である。394～396 には表面にわずかに砂粒が付着する。397 は有孔磨製石鐙である。中央部に直径 4mm の孔を両面から穿孔する。表面には研磨痕が残る。重さは 2.7g である。

## 第IV章 総括

### 第1節 調査成果のまとめ

今回の発掘調査では弥生時代後期及び古墳時代中期と平安時代中期から平安時代後期の遺構を確認している。以下、時代を追って今回の調査地点の調査成果をまとめる。

#### (1) 縄文時代

今回の調査地点では、縄文時代の遺構は検出作業を行っていない。ただし、第III章第2節で述べたように、北側隣接地である7・20次調査において、今回の下層検出面よりも更に低い標高で縄文時代晩期の遺構や遺物が確認されている。今回の調査でも、少量ながら縄文土器や石器が出土しており、今回の遺構検出面よりも下層に縄文時代の遺構面が存在する可能性がある。

#### (2) 弥生時代後期

弥生時代後期の遺構にはSX33が挙げられる。また、SD30の落ち込みからは弥生時代中期から後期にかけての土器が纏まって出土している点は注目に値する。このSD30は北側隣接地の7次調査で弥生時代後期の遺構として報告されている溝166と同一の溝である。SD30から出土した土器には古墳時代中期の遺物が多く、最終埋没の年代は古墳時代中期前半になると考えられる。このため、今回の調査ではSD30を古墳時代中期前半に埋没した遺構とするが、その始まりは弥生時代後期まで遡る可能性がある。

#### (3) 古墳時代中期

古墳時代中期の遺構には、溝や土坑が存在する。特に、SD30とSK31からは纏まった量の遺物が出土している。SD30とSK31は最終堆積層を共有しているが、この層から出土した遺物は磨滅が激しく、SD30の上流から流入してきた様子がうかがえる。また、調査区内では複数の溝(SD27・28・29・30)が確認でき、居住地としての利用には適さなかったと考えられる。更に、建物などの痕跡もないことから、この時期には調査区より上流に居住域が存在していたと考えられる。なお、古墳時代後期以降と断定できる遺物はなく、遺構も確認できない。

#### (4) 平安時代中期

調査区内で再び遺構が確認できる時期は平安時代中期である。調査区東側に位置するSB06・SB07は正方位の建物である。遺物の出土量は少ないが、土器の内容から11世紀前半以前に遡る可能性が高い。更に、北側隣接地の7・20次調査では、同じく正方位の掘立柱建物の建物169・171・177・315、SB1046・1083が10世紀に比定されている。以上のことから、7・11・20次調査で確認されている10世紀の集落の南限が本調査のSB06・07まで広がると考えられる。

#### (5) 平安時代後期

平安時代後期に入ると、調査区内に広く遺構が展開し、調査区内の中央やや北寄り調査区南端の2カ所に遺構が集中する。

調査区中央やや北寄りには建物、木棺墓、井戸、土坑などが作られる。この中で、時代が明らかな遺構のうち最も古い遺構は11世紀中葉に造営されたST01である。ST01の西側には建物群が広がっており、ST01はこれらの建物群に付随する屋敷墓である。建物群のうち、時期が特定できる建物は12世紀前半の土器が出土したSB05のみである。ただし、これらの建物群(SB02・SB03・SB04・SB05・SB09)の傾きはSB07(N-7°-W)を除き、概ねN-2~4°-Wに収まる。同時期の建物の傾きは同じ大きさになる傾向にあることから、これらの建物群の時期は11世紀中葉から12世紀前半に収まる可能性が高い。傾きの異なるSB08についても、北側隣接地の7・20次調査においてN-7~9°-Wの傾きの建物が12世紀前半に比定されていることを踏まえると、SB07も12世紀前半の建物であると考えられる。また、重複関係にないため前後関係は不明であるが、SB02とSB08は建て替えを行った建物であると考えられ、比較的長期間に渡って屋敷地として利用されている。なお、調査区南部に位置するSB10の主軸の傾きがN-2°-Wを示すことや12世紀前葉の一括性の高い土器が出土したSX18が建物群の南側に位置しており、この時期の土地利用は更に南側まで及んでいた可能性も指摘しておきたい。

調査区やや北寄りの建物群は12世紀前半までに廃絶するが、12世紀中頃から後半にかけては、調査区南端部に屋敷地が展開する。この屋敷地は東西方向の掘立柱建物1棟(SB12)と区画溝(SD13・14・15)を備えている。このうち、SD13・14については、東西方向の溝が途中で南に向かって折れ曲がっている。このような区画溝の配置から、調査区の北半と南端部の屋敷地を区画する意図を見てとることができ、調査区やや北寄りの屋敷地との連続性については低いと考えたい。また、これらの区画溝は調査区西端を流れる旧河道に接続している。この旧河道は第Ⅱ第2節で触れた旧河道と同一のものである。屋敷地内には、旧河道と屋敷地を区画するように南北方向に延びる柵列(SA34・35)が存在しており、屋敷地と旧河道は密接に結びついている。調査区南端部で出土した遺物の様相から、この屋敷地の廃絶と旧河道の埋没は概ね同時期だと考えられるが、SB12から出土した遺物はごく少量であり、旧河道の埋没時期と建物の廃絶時期の前後関係はまでは特定できない。なお、今回の調査では掘削範囲が一部に留まるため断定は出来ないものの、今回の調査地点では、旧河道は新堂遺跡の発掘調査地点よりもやや早い12世紀後半には旧河道が埋没していると考えられる。

屋敷地の廃絶後は耕作地としての利用に転換する。なお、調査区北辺に位置する坪界溝は耕作地化に伴って形成されたものであり、出土遺物による時期の特定は困難であるものの、屋敷地の廃絶後に出現した溝であると考えている。

## (6) まとめ

以上のように、平安時代中期～平安時代後期に重点を置きつつ、調査地における土地利用の変遷について整理を行った。この結果、平安時代中期から後期にかけて、断続の可能性はあるものの、位置を変えながらも居住地として長期間利用されていることが明らかとなった。

また、SB02-05・08・09と木棺墓(ST01)が併存することは明らかである。木棺墓の位置づけについては第四章第2節に譲るが、木棺墓の周りには複数の建物を擁するやや規模の大きい屋敷地が展開していたと考えられる。ただし、木棺墓の造営と屋敷地の開始時期との詳細な時期差は不明である。曲川遺跡から新堂遺跡にかけては、平安時代後期～鎌倉時代にかけての屋敷地が多く確認されており、周囲の調査成果と併せて集落の形成過程を検討する必要がある。



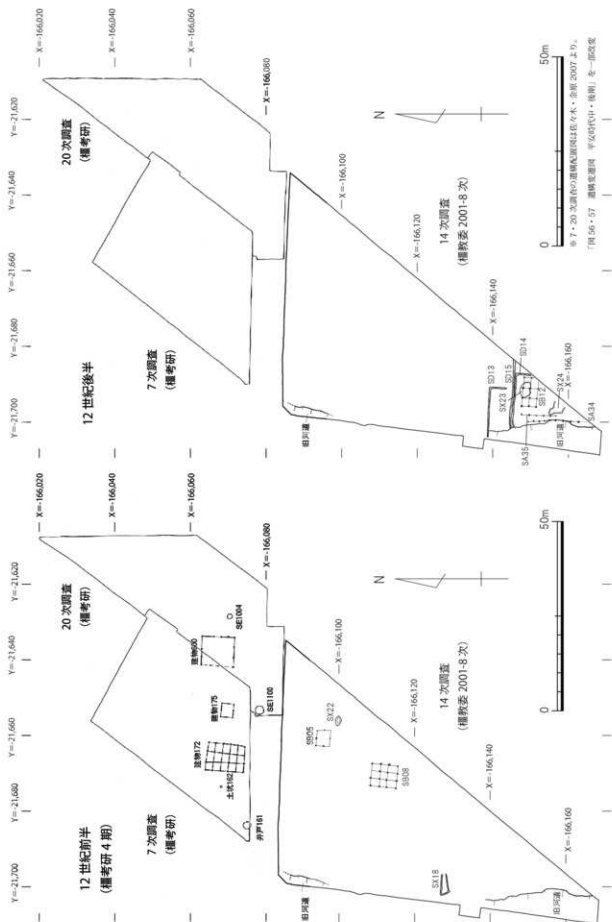


図 57 曲川遺跡 7・14・20 次調査遺構変遷図 (平安時代後期) (S=1/1,000)

## 第2節 曲川遺跡（樞教委2001－8次）の木棺墓について

### (1) 木棺墓（図8）

木棺墓ST01は、墓壇の掘り方が長辺2.2m、短辺0.6mの長方形を呈し、深さが0.25mである。この墓壇に納められていた木棺は主軸を真北に向け、長い棒材（長さ200cm、幅3.5cm）を4～6本（椀木との組み合わせが明確に確認できたのは4本）と椀となる短い棒材（長さ40cm、幅15cm）3本を組み合わせることで椀子状にして棺としている。ほとんどの木材は、表面の上部のみが残存し、下部は粘土に変質したため、木材自体の厚さは部分的に残存していた箇所では2.5～3.0cmであった。棺の蓋は消失しており、どのような木材が使用されていたかは不明である。側面に位置する長い棒材は、側板のように墓壇の縁に位置しており、土師器皿はその材にもたれかかるような状態であった。木棺北側の小口側には、長さ37.5cm、幅14.5cmのこの木棺墓で唯一の板材があり、板材の大きさや上側に棒材の一部が認められることから、蓋として用いられたものではなく、北側の小口に立てられた板と考えられる。

また、椀木となる3本の短い棒材は棺の足元側に2本近接した位置にあり、もう1本は被葬者の頭部付近にあり、棺底に対して均等に配されていない。棺の枕木として棺底を直接地面に接地することを防ぐためではなく、長軸の棒材を安定させるために置かれていると考えられる。用いられた材料と構造から埋葬時に墓壇内で構築された簡易的な木棺であると推測される。この棺は床・側板に板材が用いられていない特徴的な形態をしていることから、「椀子状木棺」と呼称する。

木棺内では被葬者の頭骨・歯（図版23）・骨盤・大腿骨が確認できたが、残存状態が極めて悪い状態で、年齢・性別を判明することは不可能であった。遺体の出土状況と棺の大きさから、この被葬者の身長が概ね150cm前後の身長であろうと推測できる。副葬品としては、「て」字状土師器皿が1点、土師器皿6点（いずれも直径10cmほどの小形品）、数珠と考えられるガラス製の玉が8点出土している。「て」字状土師器皿は、木棺内の被葬者の両側に、皿の口縁を木棺側面に向けて木棺に立て掛けた状態で出土しており、被葬者の東側に6点、西側に1点が置かれ、西側に置かれたものの中には、2枚を重ねた状態のものもあった。また、数珠と考えられる直径0.6～0.7cmのガラス製の玉は、被葬者の頭骨・歯が出土した周辺から出土した。被葬者の腕部及び首から胸部にかけて残存状態が悪く、埋葬時にこの数珠が手または首に掛けられていたかは判断できない。

この木棺墓に被葬者が埋葬されたのは、副葬品の土師器皿から11世紀半ば頃の時期が想定される。改めてこの木棺墓の特徴を要約すると以下の点が挙げられる。

- ・棒材を組み合わせて椀子を作る。その場で作られた木棺の代用品と考えられる。
- ・副葬品として土師器皿（小形）・ガラス玉（数珠？）を埋納する。
- ・土師器皿は、棺内の側辺、被葬者の胴から足にかけての範囲に置かれている。

### (2) 椀木を伴う木棺墓

以上、曲川遺跡（樞教委2001－8次）の木棺墓ST01（以下、「曲川ST01」と略す）について述べたが、「椀子状木棺」のように椀を伴う木棺墓の他の事例を含め検討を行う。

現時点で、椀を伴う木棺墓は曲川ST01を含め、博多遺跡第39次124号土壇（福岡県）、二葉町遺



表3 木棺墓計測表

No.	遺跡名	位置	棺短辺 (cm)	棺長辺 (cm)	時期	跡 ST302・303 (兵庫県)、 吹田操車場遺跡 395 木 棺墓 (大阪府)、長岡京 左京第 245 次 SX24501 、平安京右京五条二坊 SK3 (京都府)、麻生遺 跡土壇 5、下鉤東・蜂 屋遺跡 D 区 SX72 (滋賀 県)、松河戸遺跡 SK168 (愛知県) の計 10 例を 確認した (棺材が粘土に
1	曲川遺跡(僧教委2001-8次)	奈良県	40	200	12世紀中頃	
2	麻生遺跡	滋賀県	60	120	12世紀後半	
3	博多遺跡第39次	福岡県	70	120	12世紀中頃	
4	下鉤東・蜂屋遺跡SX72	滋賀県	80	140	12世紀後半	
5	吹田操車場遺跡	大阪府	50	140	12世紀中頃～後半	
6	平安京右京五条二坊SK3	京都府	65	180	11世紀後半から12世紀前半	
7	二葉町遺跡ST302	兵庫県	50	180	12世紀末から13世紀前半	
8	松河戸遺跡	愛知県	70	180	12世紀中頃	
9	長岡京左京第245次	京都府	80	220	8世紀末以降	
10	二葉町遺跡ST303	兵庫県	90	210	13世紀前半	
		中央値	67.5	180		

変質した痕跡を残すものも含む) (図 58)。東は愛知県から西は福岡県まで畿内を中心に広範囲に検出例が認められ、墓の時期は最も古い時期で長岡京左京第 245 次 SX24501 が長岡京から平安京への遷都後の 8 世紀末以降の時期が想定されており、他の事例は 12 世紀中頃を中心に 11 世紀後半～13 世紀前半の時期に比定されている。いずれも埋葬方位は頭部を北・北西方向に向けており<sup>1)</sup>、棺の大きさ<sup>2)</sup>は棺の主軸長から 120～150cm (図 58-2・3・4・5)、170～180cm (図 58-6・7・8)、200～210cm (図 58-1・9・10) の大きく 3 つに分類できる。

棺の大きさは、被葬者の身長(性別・年齢により異なる)及び埋葬体位(伸展葬か屈葬)に左右されると考えられるが、被葬者の残存状況が悪い事例が多く、判断ができない。各木棺墓の計測値の中央値は短辺が 67.5cm、長辺が 180cm で、平安京右京五条二坊 SK3 や松河戸遺跡 SK168 が標準的な形態の木棺墓であると考えられる。椀が残存している例(木質が粘土に変質していない状態のもの)では、棺の長軸が 120cm までのものは 2 本、140cm 以上になると 3 本置かれている。椀を伴う木棺墓の時期に関しては、五十川伸矢氏は「底に数本の椀を短辺方向にわたすものがある。このうち最も古いものは 10 世紀の年代を示すが、鎌倉時代に続き、中世の半ばごろに入ってやや減少するようである。」という指摘をしている。

曲川 ST01 は短辺が 40cm、長辺が 200cm であり、標準的な形態の木棺墓と比較すると棺の幅がやや狭く、長軸が長い。構造的に棺底の材に板材が用いられておらず、長軸の椀材が用いられている点では長岡京 SX24501 と全く同じ構造であると言える。

また、他の木棺墓が地域を超えて、被葬者の頭部付近<sup>3)</sup>または足元の木棺の小口側に土師器皿などの副葬品が置かれるという共通性を示しているのに対して、曲川 ST01 のみが、他の棺よりも長軸がかなり長く、頭部側や足元側にも十分な空間があるにも関わらず、棺の側面に副葬品(被葬者が身に付けていたものを除く)が入られ、棺の小口側に副葬品が置かれないという特徴を示している。

### (3) 屋敷墓 (図 58)

原口正三氏は、建物に近接して存在する土坑墓・木棺墓を「屋敷墓」として位置づけ、その被葬者が屋敷の創設にかかわる人物であると規定しており、建物群の付近から検出される墳墓は屋敷墓として認知されている。

橘田正徳氏は、屋敷墓とする墳墓とは「集落内から発見され、しかもその集落の継続期間中に作ら

れたもので、個々の建物群と有機的な関係でできる墳墓」としており、屋敷墓が存在する建物の規模としてA：主屋が20～40㎡のもの、B：主屋が40～100㎡のもの、C：主屋が80㎡以上、大型建物が2～3棟、占地面积が方半町～方一町ものを挙げ、A・Bを百姓層、Cを在地領主層とし、特にA・Bに屋敷墓が多く、前期屋敷墓を作る慣行は在地領主層から発生したのではなく、百姓層の独自の慣行として成立したとしている。

曲川ST01は複数の掘立柱建物に近接しており、最も近接した位置にあるSB02は約56㎡、その西隣にあるSB04が最も大きな建物跡で約63.6㎡あり、墓を囲むように北側にはSB05、東側にはSB06がある。SB03やSB07のように建物が同じ位置に重複しており、建て替えが行われていることが考えられることから、集落が継続して営まれたと想定される。木棺墓周辺の遺構の検出状況を橋田氏の分類に当てはめると、曲川ST01の被葬者の階層はB型の百姓層に該当すると考えられる。

また、屋敷墓が百姓層の独自の慣行として成立したと考えられている点を重視すると曲川遺跡の簀子状木棺の形態・副葬品の供献位置といった埋葬儀礼は長岡京SX24501と近似していることから、京周辺の影響を受け、古い形態を維持しつつも、副葬品を被葬者の頭部周辺に置くという12世紀を中心とした時期に一般的に見られる埋葬儀礼が採用されていない点から、曲川遺跡の簀子状木棺が古代から中世の過渡期の木棺墓であり、「屋敷墓」の発生期のもつと捉えることができる一例であると言える。

#### 【謝辞】

資料の収集には、発掘調査時、学生で補助員として協力していただいた奥井智子氏（京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課）に協力を頂きました。記して謝意を表します。

#### 【註】

- 1) 下鉤東・蜂屋遺跡D区SX72は報告書内で、方位が示されていないため、木棺の主軸方向、埋蔵方位は不明である。
- 2) 棺の大きさは棺の外寸値で、報告書内に記されていないものは、実測図から計測した値で、端数を切り上げて集計を行った。
- 3) 博多遺跡第39次124号土壇の埋葬方位は明示されていない。副葬品は破片の状態で、床面に接しているものがない状態であるが、出土範囲は木棺南側の小口側に集中している。埋葬方位が北であるならば、副葬品は足元側に置かれていたことになり、埋葬方位が逆になれば頭部側に置かれていたとも判断できる。本文では他の木棺墓と同様に埋葬方位は北西方向として考えたい。

#### 【参考文献】

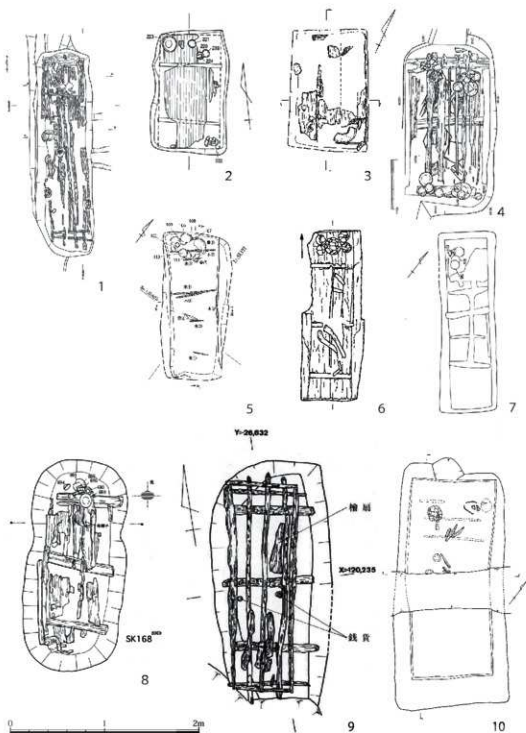
- 五十川伸矢 1996「古代・中世の京都の墓」『国立歴史民俗博物館研究報告』第68集  
橋田正徳 1991「屋敷墓試論」『中近世土器の基礎研究』Ⅶ  
原口正三 1977「古代、中世の集落」『考古学研究』92号  
1982「大阪府高槻市宮田遺跡再論」『考古学論考 小林行雄博士古希記念論文集』

【発掘調査報告書】※図58使用図面は下記報告書より引用  
京都市埋蔵文化財研究所 1981『平安京跡発掘調査報告』昭和55年度

- 神戸市教育委員会 2001『二葉町遺跡発掘調査報告書』第3・5・7・8・9・12次調査  
 神戸市教育委員会 2008『二葉町遺跡発掘調査報告書』第14～21次調査  
 財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1994『松河戸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第48集  
 財団法人大阪府文化財センター 2011『吹田操車場遺跡』VI  
 滋賀県教育委員会 1987『ほ場整備関係遺跡調査発掘報告書』XIV-5  
 長岡京市埋蔵文化財センター 1992「左京第245次(7ANMKC-3地区)調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成2年度  
 福岡市教育委員会 1990『博多』14 博多遺跡群第39次調査概報 福岡市埋蔵文化財調査報告書第229集  
 栗東市文化体育振興事業団文化財センター 2004『栗東市埋蔵文化財調査報告 2002年度 年報』

#### 【曲川遺跡発掘調査文献一覧】

- 1次 今尾文昭 1981「橿原市曲川遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』(1979年度) 奈良県立橿原考古学研究所  
 2次 橿原市教育委員会 1988「曲川遺跡の調査」『埋蔵文化財調査集報』  
 3次 橿原市千塚資料館 1987「曲川遺跡」『先人たちの遺産—昭和61年度発掘調査の成果から—』  
 4次 阪口俊幸 1988「曲川」『大和を掘る』(1987年度発掘調査速報展) 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館  
 5・6次 楠本哲夫・佐々木好直 1990「奈良県橿原市新堂町 曲川遺跡第5～7次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』(1989年度) 奈良県立橿原考古学研究所  
 7次 佐々木好直・金原正明 2007『曲川遺跡Ⅱ』(奈良県文化財調査報告書第120集) 奈良県立橿原考古学研究所  
 8～10次 竹田正則・濱口和弘 1999「曲川遺跡の調査」『かしはらの歴史をさぐる』6 橿原市千塚資料館  
 11次 中井一夫・小山和浩 2000「京奈和自動車道大和区間用地内曲川遺跡試掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』(1999年度) 奈良県立橿原考古学研究所  
 12次 平松良雄 2001「橿原市曲川遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』(2000年度) 奈良県立橿原考古学研究所  
 13次 平岩欣太・寛和也 2012『曲川遺跡』 橿原市教育委員会  
 14次(本報告) 濱岡大輔 2003「曲川遺跡 馬場地区の調査」『かしはらの歴史をさぐる』11 橿原市千塚資料館  
 15～17次 平岩欣太・川部浩司 2004「曲川遺跡 馬場地区の調査」『かしはらの歴史をさぐる』10 橿原市千塚資料館  
 18・19次 濱岡大輔 2004「曲川遺跡 久保間地区の調査」『かしはらの歴史をさぐる』11 橿原市千塚資料館  
 20次 北山峰生・松井一晃 2005『曲川遺跡』(奈良県立橿原考古学研究所調査報告集第90冊) 奈良県立橿原考古学研究所  
 21次 船築紀子・佐藤聖聖・坪井清足・辻本裕也・藤井章徳 2006『曲川遺跡発掘調査報告書(2004年度調査)』財団法人元興寺文化財研究所  
 22次 村田裕介・藤井章徳・佐藤聖聖 2009『曲川遺跡発掘調査概要報告書(2007年度調査)』財団法人元興寺文化財研究所



1. 曲川遺跡（權教委 2001—8 次）ST01（奈良県）
2. 麻生遺跡土壙 5（滋賀県）
3. 博多遺跡第 39 次 124 号土壙（福岡県）
4. 下鈎東・蜂屋遺跡 D 区 SX72（滋賀県）
5. 吹田操車場遺跡 395 木棺墓（大阪府）
6. 平安京右京五条二坊 SK3（京都府）
7. 二葉町遺跡 ST302（兵庫県）
8. 松河戸遺跡 SK168（愛知県）
9. 長岡京左京第 245 次 SX24501（京都府）
10. 二葉町遺跡 ST303（兵庫県）

図 58 棧のある木棺墓 (S = 1/40)

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	まがりのかわせき2 一けいむわじどうしゃどう「やまとくかん」けんせつこともなうはくつちようさほうこくしょー							
書名	曲川遺跡Ⅱ ー京奈和自動車道「大和区間」建設に伴う発掘調査報告書ー							
シリーズ名	橿原市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第20冊							
編著者名	橿原市 魅力創造部 文化財保存活用課 上井佐紀 特定非営利活動法人広島文化財センター 瀧岡大輔							
編集機関	橿原市 魅力創造部 文化財保存活用課							
所在地	〒634-0826 奈良県橿原市川西町858-1 TEL 0744-22-4001 FAX 0744-26-1114							
発行年月日	西暦2024年(令和6年)3月20日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まがりのかわ 曲川遺跡	なごけん 奈良県 かしはらし 橿原市 くわせいちょう 雲梯町	29205	14A18	34° 30' 09"	135° 45' 51"	2001/10/22 ～ 2002/3/29	3,000 ㎡	京奈和自動車道建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
まがりのかわ 曲川遺跡	集落	弥生時代後期 ・ 古墳時代中期  平安時代中期 ～平安時代後期		河道・溝・土坑  掘立柱建物・木棺墓 溝・河道・耕作溝		縄文土器・弥生土器 土師器・石器 石製品・木製品  土師器・須恵器 瓦器・陶磁器 石製品		橿教委 2001 ー8次 調査 調査後、 道路建 設により消滅。
要約	<p>弥生時代後期及び古墳時代中期前半、平安時代中期～平安時代後期の遺構が存在することを確認している。縄文時代後期～弥生時代中期に遡る遺物も出土している。</p> <p>弥生時代後期の遺構は非常に少ないが、北側調査地(曲川遺跡7次調査)で弥生時代後期の遺構がまとまって確認されている点は注目に値する。</p> <p>古墳時代中期前半の遺構には溝と土坑がある。南北方向に流れる溝が多く、居住域としての利用に適さない様子である。</p> <p>平安時代中期～後期の主な遺構には掘立柱建物、木棺墓、溝、河道、耕作溝がある。一度耕作地として開発されたあと、屋敷地として利用され、再度耕作地へと変化している。屋敷地の主な遺構には建物、木棺墓、区画溝などがあり、平安時代後期の屋敷地の構成を知ることができる。平安時代後期の屋敷地は2時期に分かれ、11世紀中頃～12世紀前半にかけては調査区中央や北寄り、12世紀後半には調査区南端部に屋敷地が展開している。</p>							



調査地遠景 航空写真（東から。奥が二上山）



調査地遠景 航空写真（西北西から。中央が歎傷山）



調査地遠景 航空写真(南西から)



調査地遠景 航空写真(南南西から。手前が大和高田バイパス)



調査区全景 上層道橋完備状況（俯瞰。上が西）



調査地中景 航空写真（南から）





調査区全景。下層遺構完掘状況（上が北）



調査地全景 航空写真（上が東）



調査区中景 下層遺構完掘状況（南から）

図版 6



調査区全景 下層遺構完掘状況（南南西から）



調査区全景 下層遺構完掘状況（北東から）



調査区北半 下層遺構完掘状況（南から）



ST01 遺物出土状況（南から）



ST01 完掘状況 (南から)



ST01 北半遺物出土状況 (南から)



ST01 遺物出土状況 (南西から)



SP103 (SB02) 土層断面 (東から)



SP111 (SB02) 土層断面 (東から)



SB02・03 完掘状況 検出状況（南から）



SP123 (SB03) 土層断面（南東から）



SP127 (SB04) 土層断面（北から）



SP149 (SB06・07) 土層断面（北から）



SP151・157 (SB06・07) 土層断面（西から）



調査区北部 SB04 検出状況 (南から)



調査区東部 SB06・07 検出状況 (西から)



調査区東部 SB08 検出状況 (南から)



SP196 (SB11) 土層断面 (北東から)



SP159 (SB08) 土層断面 (北から)



SP204 (SB12) 土層断面 (北東から)



SP203 (SB12) 土層断面 (北西から)





調査区中央 SB09 検出状況（南から）



調査区南部 SB10 検出状況（北から）



調査区西部 SB11 検出状況（北から）



調査区南部 SD14・15 完掘状況、SB12 検出状況（北から）

図版 14



SD14・15 土層断面 (西から)



SE16 検出状況 (南から)



SE16 土層断面 (北から)



SE16 完掘状況 (北から)



SE17 土層断面 (北から)



SE17 完掘状況 (北から)



SX18 遺物出土状況 (東から)



SX18 遺物出土状況（北から）



SX18 完掘状況（北から）



SK19 土層断面（北から）



SK19 完掘状況（北から）



SK20 土層断面（北から）



SK20 完掘状況（北から）



SK21 土層断面（西から）



SK25 完掘状況（南から）



SX22 土層断面（北から）



SX22 完掘状況（北から）



SX23 完掘状況（西から）



SX24 完掘状況（北西から）



旧河道①土層断面（北から）



旧河道③土層断面（北西から）



旧河道断割り状況（北東から）



旧河道④土層断面 (南から)



SP52 遺物出土状況 (東から)



SD27 ①土層断面 (南から)



SD27 ②土層断面 (西から)



SD27 完掘状況 (北から)



SD27・30 完掘状況 (南南東から)



SD27・30 完掘状況 (南東から)



SD27・30 切り合い部分土層断面 (北西から)



SD30 落ち込み土層断面 (南から)



SD30 落ち込み完掘状況 (北から)



SD30・SK31 南東壁土層断面 (北西から)





SK31 完掘状況（北西から）



SK31 テラス部分遺物出土状況（南東から）



SD28・29 完掘状況 (南から)



SD28 土層断面 (北から)



SD28 土層断面（北から）



SD28 土層断面（北東から）



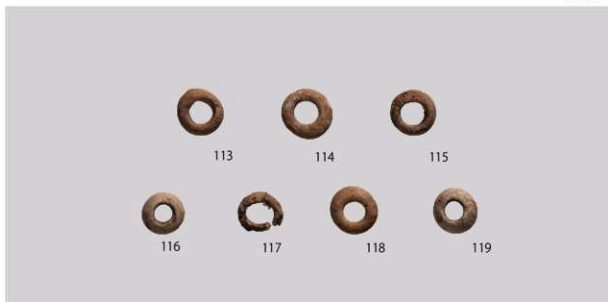
SX33 遺物出土状況（東から）



SK32 土層断面（東から）



SK32 完掘状況（北東から）



图版 24

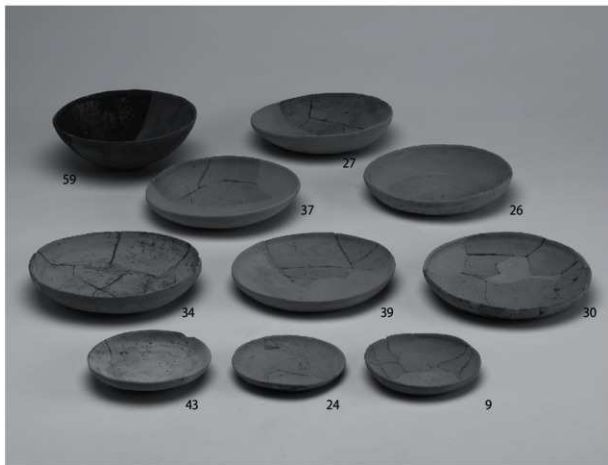
耕作溝  
出土遺物





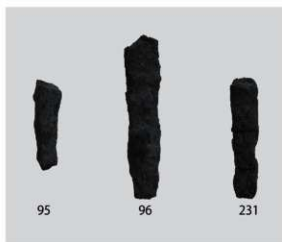
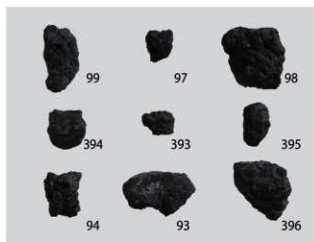
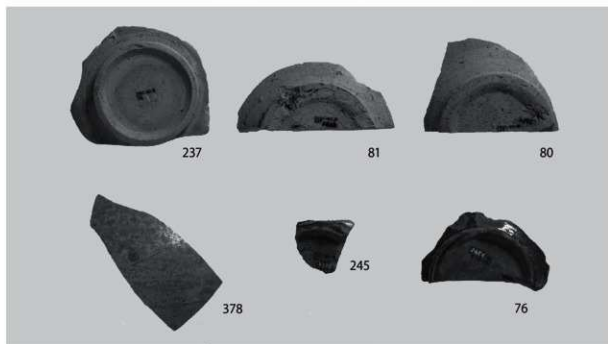
図版 26

耕作溝  
SD14、  
STO1、  
SB  
出土遺物











91



92



102



106



103



107



104



108



105



109

図版 30

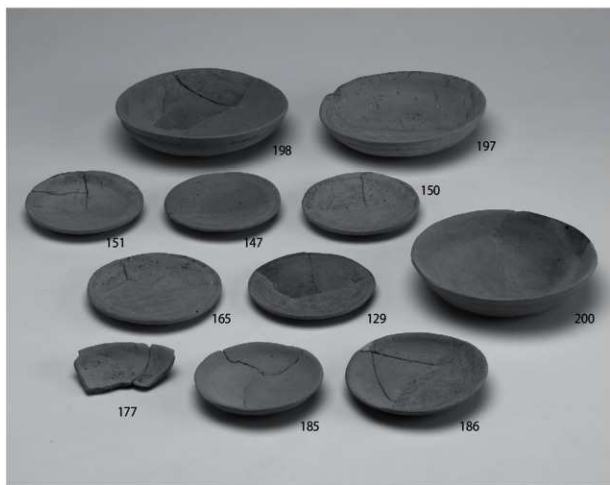
SX18  
出土遺物

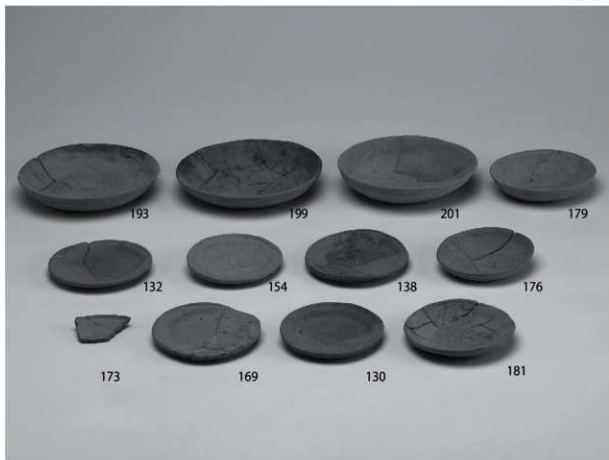




図版 32

S  
X  
1  
8  
出  
土  
遺  
物





図版 34

SX18  
出土遺物

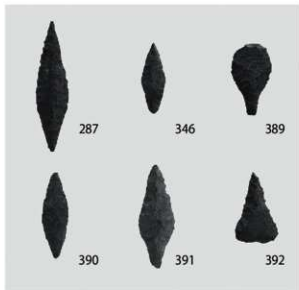




S K 2 1、S X 2 2、  
S X 2 3、旧河道  
出土遺物







SD27、SK31、包含層・重機掘削時等 出土遺物

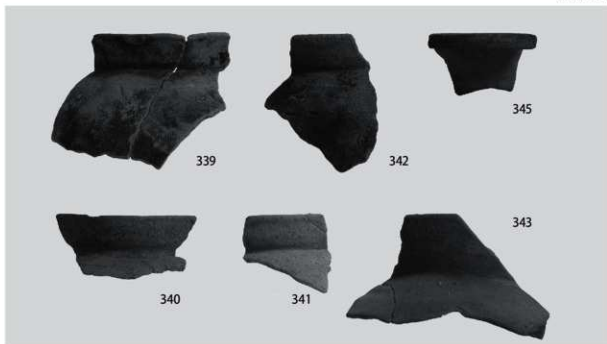




図版 40

S  
K  
3  
1  
出  
土  
遺  
物

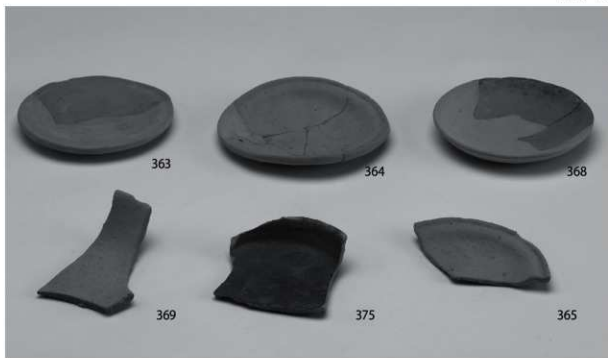




図版 42

S K 3 2、包含層・重機掘削時等出土遺物







橿原市埋蔵文化財調査報告 第20冊

## 曲川遺跡Ⅱ

—京奈和自動車道「大和区間」建設に伴う発掘調査報告書—

発行年月日 令和6（2024）年3月19日

編集・発行 橿原市

印刷 株式会社 サカタ企画印刷